目が覚めたら異世界だったByカズマ

スーバル・フォン・ナッツキー２世

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

欲しいゲームを買えず途方に暮れながら帰宅中、気付いた時には異世界に飛んでいた、きれいで勤勉なカズマのお話。

目次

1話　異世界？ ―― 1
2話　冒険者？ ―― 9
3話　モンスター？ ―― 17
4話　蛙戦線 ―― 25
5話　紅魔の娘 ―― 34
6話　爆裂魔法 ―― 43
7話　スキル ―― 51
8話　魔法 ―― 58
9話　トモダチ？ ―― 66
10話　冒険者 ―― 78
11話　パーティー ―― 87
12話　旅立ち ―― 95
13話　盗賊少女とクルセイダー ―― 103
14話　キャベツ　襲来 ―― 114
15話　収穫クエストを終え ―― 122
16話　出来ることから ―― 132
17話　魔道具店の店主様 ―― 142
18話　【秘技】リッチーのスキル ―― 153

1話　異世界？

気が付いたら知らない世界に居た。

レンガや木組みの街並みがヨーロッパらしい雰囲気を出していたが、俺が先程までいた所は片田舎の田んぼ道。こんな風景とは到底離れていた。

人気ネットゲームの初回限定版を購入するため、珍しく買い物に行ったのにも関わらず品切れで手に入らず、失意のままに道中のコンビニでインスタントのラーメンとスナック菓子とジュースを買った帰り道。何ヶ月も通っていない同じ学校の制服を着た女の子とすれ違ったと思ったらこんな所にいた。

これって今流行りの異世界転生…？

いや、俺死んでないよな…死んでないよね？

じゃあなんでこんな所に…？

普通はこう言うのって俺を召喚した人間が目の前にいるとか、神様がチート能力を与えてくれて異世界で無双してハーレムつくるとかそう言った事だよね!?チート能力なんて貰ってないぞ！俺ただの一般人！無双してハーレムとか夢のまた夢!!どうなってるんだよ！これじゃあ街の外出たらそのままお亡くなりなる奴！そんなの俺の同期だ

けで良いんだよ！同期って誰だよ。
終わった…俺の人生。幼馴染と将来結婚しようと意気込んでいたのに先輩ヤンキーに寝取られた挙句ヤンキーのバイク2ケツしてたら事故って逝っちまった時から俺の人生終わってるんだよ…いっそ殺せ！俺の事をスパッと殺せ!!
いや死ぬのは怖いですやめて許してください。

おっと、俺としたことが随分と錯乱してしまった。筋トレしないと。筋肉は全てを解決してくれる。
いや、街中でやるのは恥ずかしいな。
…と、取り敢えずここが何処なのかハッキリさせないと。…気に食わないがあそこの金髪イケメンに話しかけるか…。
「あ、あの！すいません！」
「はい…俺を呼びましたか？」
「あのー、遠くの国からこの街に来て、右も左も分からないんですがー。ここはどこですか？」
「ここですか？このはアクセルの街ですよ。…そのジャージ…。もしかして君は日本人？」

「日本人…ってことはもしかしてあんたも…？」
　ラッキー！初っ端から日本人とは！同郷の奴がいて良かった！…あれ？もしかしてここ日本だったりする？
「こんな所で日本人に会えるとは…俺はサトウカズマ！気付いたらこの街に居たんだ」
「僕の名前はミツルギキョウヤ。僕も最近このアクセルっていう初心者の街に来たばかりなんだ。…所で気付いたらって、女神様とは会ってないのかい？」
「へっ？女神？」
「え？」
　…確かにこのイケメン。初心者って割には随分と強そうな剣を持っている。服装はこの世界に合わせた感じになっているが、対して強そうに見えない。
　まさかこいつが主人公で、俺はただのモブ…？
「君は向こうで死んだんじゃ…」
「いや、家に帰ってる途中、気付いたらここに居たんだよ。痛い思いなんてしてないし」
「でもそれだと、ここは言語が違うから…この文字読めるかい？」
「んー…なんだこれ？どこの言葉だ？俺日本語と英語しか出来ねぇぞ」
　もしかして、これ異世界語？こう言うのって普通は読めるもんじゃないの？言葉は分かるのに、読めないってマジかよ…一気に難易度上がってきたぞ。

「…これは困ったかもしれない」
「えっ?」
「この世界は街の外には魔物がいて、冒険者ギルドに登録された職業の人間が外の魔物を狩って平和を守り、いずれは魔王軍っていう脅威を倒しに行くんだ。特に僕みたいな転生者は女神様に魔王を討てと使命があるんだけど…」
　なんか自分語り始まったぞ?大丈夫かこいつ?なんかナルシスト入ってない?
「本題に入ってくれないか?話が理解できない」
「おっと、すまない。その冒険者ギルドでの依頼は全てこの言語で書かれているし、街の地図や資料も全てこの字だ」
「…つまり、言葉が理解できない俺は」
「相当苦労することになると思う。本当は転生する時に頭の中に言語の知識がインプットされるみたいなんだけど、君はその過程が飛ばされているんだ。何故ここで会話が成り立つかは分からないんだけど、君は本当に言葉も分からない外国人みたいな存在なんだ」
　…引きこもりのニートが誰かと円滑に話せるわけねぇよ。それって詰みなんじゃねぇか?
「都合良くお前が日本人で、それで意思疎通取れているって線は…」

「否定できないね。でもそうと決まった訳ではない。これから僕と一緒に冒険者ギルドに行かないか？」
「良いのか？」
「ここで見捨てるような真似をしたら、女神様に顔向けできないからね」
　こいつ紳士か？いや、自分のこと勇者だと思っている典型的ななろう系主人公だろうな。俺とは正直合いそうにない。
「それなら頼む。流石に右も左も分からないのは辛い」
「それなら僕に着いてきて。案内するよ」
「あ、あぁ。ありがとう」
　見た感じ勇者っぽいイケメンと、こんな異世界に似合わないジャージの男。周りから明らかに浮いた服装に俺は縮こまってしまう。ただ、聞き耳立てて聞こえるのは「珍しい格好をしている」とハッキリ聞き取れたので、言語の障害は文字だけなのではと希望が強くなった。
「ここが冒険者ギルドだよ」
　周りには2階や高くても3階と言った背の低い建物ばかりだった。ギルドも例に漏れず建物の大きさ高くないが、他と違い屋根が高く、非常に目立っていた。
「やっぱ冒険者ギルドと言っても、この時代背景を見るにそこまで技術の発展は見られ

ないんだな」
「ここは科学より魔法が発展しているからね。でもやろうと思えば作れるかな。遠く見えるかい?」
「…遠く…あれか。外に巨人でも居るのか?」
「そこまでの高さはないよ。それでも２０ｍ近くあるんじゃないかな?」
「まあ、中身空洞じゃないならおかしな話では無いか」
何かで読んだ気もするが、流石に異世界でそんな簡単に建物が崩れられてたまるか。
ギルドの中に入ると、昼間と言うのに大盛り上がり。食堂らしき所ではイカつい野郎共が木製のジョッキを掲げて揚げ物を摘んでいる。美味そう。
「おっと、魔剣の兄ちゃんじゃねぇか。隣に居るのは見ねぇ顔だ。新入りか?」
やっぱ言葉は理解できる。それだけでも知れて良かったかもしれない。
「俺はカズマ。訳あってこの街に来た。よろしく頼む」
「ほう…どうやら事情があるみたいだな」
「あぁ。詮索しないでくれると助かる」
「そうか…それなら俺も深入りしねぇ。カズマと言ったな。ようこそ地獄の入口へ。歓迎するぜ」
じ、地獄。いや、こういう世界だと外にやべぇモンスターがいるから死と隣り合わせ

と言うなら間違いないな…。
「あぁ、ありがとう」
　昼からの呑んだくれだから恐らく茶番劇入っていると思うが、この世界での先輩の言葉だ。あながち間違いではないのだろう。
「それじゃあ佐藤くん。冒険者登録はあっちだよ。登録にはお金が必要なんだけど…」
「あぁ、俺は財布の中には諭吉3人と小銭が数枚くらいしかない」
「それじゃあ無理かな…。ここの通貨はエリスと言うんだ。登録には１０００エリス必要なんだ」
　じゃあ俺冒険者になれないじゃん。やっぱモブが関の山だったか…。
「だからこれで登録をすると良い。この2枚で１０００エリス。これで冒険者登録ができる」
　こいつ神か?そんな金をポンと渡していいものなのか?
「いいのか?」
「もちろん。本当はここに来る時にはこれと数日分の最低限の生活費は貰えるんだ。本当は生活費もあげたいんだけど、僕も装備を整えて魔王軍に一刻も早く立ち向かわないとだから」
「いや、貰えるだけありがたい。モンスターは倒せなくても仕事なら探せばありそうだ」

ミツルギは自分の事を勇者だと思っている。これは間違いないだろう。女神からの使命とか言っていた。俺はその女神に会っていないが、こんなイケメンが使命に焚き付けられる程なのだから、よっぽど美人で慈愛に溢れた女神なのだろう。

「佐藤くんは強いんだね」

「さあな。もしかしたら本当に強いかもな」

「だね。僕も付き添うから冒険者登録しようか」

2話　冒険者？

「いらっしゃいませ。本日はどういったご用件で？」
　ギルドの受付嬢はこれはこれは美人でスタイルの良い女性だった。思わずたわわに実った2つの果実に目が泳ぎ始めそうになるが、目的を果たさねばと目を捕らえる。
「冒険者になりたいんですけど…」
「冒険者ですね。登録には１０００エリス必要ですがお持ちですか？」
「ええ…これですね」
「はい。丁度ですね。こちらに必要事項の記入をお願いします」
　役所みたいな感じだ。ただこの国の文字は知らない…。
「ミツルギ」
「やっぱ文字は読めないか…。じゃあ順番に聞いてくから、それに答えて」
「すまない」
「あのー、ミツルギさんのご友人さんでしょうか？」
「は、はい。サトウカズマです」
「随分と遠くの国から来られたんですか？」

なんて言えば良いのか…。

正直に答えたところで不法入国の犯罪者。なら真実と嘘を混ぜながら話すしかないか…。こんな美人さんに嘘つきたくないがなぁ。

「故郷で何もしてなかったので、新天地で何かしようと思い立ち、ならば違う国で働いてみようと思ったんです。ただ、話せるようになるまでは良かったのですが、中々文字が苦手で」

「そうだったのですね。ただ他の国の言葉は対応してないので、そうですね。代わりにミツルギさん記入お願いします」

「もちろん引き受けます」

そこから身長、体重、年齢、特技などなど、聞かれた事に答えていきながら記入を進める。

「これで以上だね」

「書き終わりましたか?それではこちらの機械に手をかざしてください。サトウさんのステータスを読み取ります」

そんなご都合の様にステータスとか言っていいのか?俺はゲームの世界に巻き込まれたのだろうか…。まあ確かに、自分の力を数値に表せるのは良いかもしれんがなぁ。なんでもかんでも数値で決めるのは良くないよなぁ。こういう所は日本とあまり変わ

らないかも。
「…はい！結果が出ました…カズマさんは…すごい！全体的にステータス高めですね！あまり冒険者では役立たないんですけど、幸運がずば抜けて高いです！どの職業にもなれるステータスは持っているんですけど、正直商人やる方が成功する気がしますね」
　んん？これは良い評価なのか、冒険者としては悪い評価なのか…。
「…あれ？このスキル何でしょう？なんて書いているのか分からない…」
「そもそも全体的に何書いてるか分からないぞ」
「…これは、本当になんて書いているんだ？」
「もしかしたらかなり昔の言葉かもしれません。翻訳に引っかからないので…。ですがどうして…」
　ま、まあ俺は中々の才能を持っているから、チートまではいかなくとも大活躍出来るだろうな！どうしようかなぁ…魔法とかあるのかな？
「魔法使い的な奴はあるんですか？」
「魔法使い…サトウさんだと上位職のアークウィザードになれますね！」
「じゃあそれで！」
　よっしゃあ！これで異世界無双の第１歩を「あ、あれ？」…えっ？
「どうしたんですか？」

「…エラーが起きて、適性を満たしているのにアークウィザードになれないですね」
えっ?それってマジ?もしかしてこのなんて書いているかみんな分からないこれが原因?
「ほ、他の職業は。強そうな職業なら…」
魔法使いになれないだけだ、と思ったら聖騎士もソードマスターも前衛も後衛も、まさかただの剣士にもなれないとは…どうなってる!これって呪いか!?呪いなのか!?
もしかして魔女に好かれたとかあれ?もしかして俺の能力死に戻り!?
んな馬鹿な
「残すは最弱職の冒険者…。でもこの幸運を見る限り冒険者やるくらいなら商人になった方が成功しますよ」
「佐藤くん…」
おいおい、俺の事を憐れむなよ。その同情するかの様な、励まそうとしようとしてるその顔をやめてくれ。引きこもりになる。
「いえ…冒険者でお願いします」
そんな最弱職でも生きていける環境なのかは謎だが、きっと大丈夫だろう。ご都合的なあれが働いてくれる。きっとこれも呪いじゃなくてバフだったりするはず!
…スキルを手に入れるのにも教えて貰って適正職より倍以上のスキルポイントを払

い、適正職よりもかなり劣ったような技で正直やっていけるのかなぁ。魔法使いなりたかったなぁ。

「…冒険者…はい！申し込み完了です！…しかしこのような方は初めてです。呪いの可能性もあるので1度教会で祈りを捧げた方が良いかもしれません」

うぅ…俺の異世界無双チートハーレム生活が…うぅ…。

こんな訳が分からない呪い。ミツルギには申し訳ないが、俺は魔王を倒すなんて事は無理そうだ。

「佐藤くん…。そう、気を落とさないでくれ。なんなら僕がレベル上げにも付き合うし、呪いを解呪してくれるプリーストだって見つけ出すよ」

こいつ、いけ好かないイケメンだと思ってたが、やっぱ本当に優しい奴だ。かなりナルシストで周りが見えてなさそうな所はあるが、こうして接するに根は良い奴なのだろう。そんなに女神が自分の闘志を燃やしてくれるほど美しいのかは知らないが、ちょっとそういった所は怖い。

「いや、いいよ。多分俺じゃあお荷物だ。言葉も分かんねぇしな」

「佐藤くん」

「…魔王、倒すんだろ？」

「だが、しかし「俺のことは良い。俺が行ったところで盾にもなれない。お前は信頼出来

る強い仲間を見つけねぇと。俺なんかに構ってる暇は無いんじゃないか?」…そうだね」

今の俺はテコでも動かない。命の恩人の迷惑をかけるような真似は出来ないからな。

「金、いつ返せるか分からないが、真っ当に働いて返すよ」

「いや、大丈夫。ただ、もし僕がほかの街に行くことになって会えなくなっても。また元気な姿を見せて欲しい」

…めっちゃお人好しだよこいつ。爽やかなイケメンだよ。女の子簡単に堕ちちゃうよ…。そんなイケメンを前に俺みたいなフツメンは影が薄くなっちゃうよ…。良い奴だけどやっぱこいつと行動は難しそうだ。命の恩人だけど。

「あぁ。同じ日本人同士頑張ろうぜ。互いにな」

互いの拳をぶつける。こんな友達とか、ライバルみたいな事最後にやったのいつだったかな。何ヶ月もリア友と遊んですら居なかったからな。

ミツルギとは仲間と言うより、良き友人になれればいいな。良ければ可愛い女の子を紹介んん!!

まずは言葉と生き残る為のお金を稼ぎに行かないと…。

…そう言えば冒険者って、なにが出来るんだろう。覚えることが多いな…。ゲームにはチュートリアルはあるが、人生はそうはいかない。自分で学ぶ必要があるからな。法則は生活の中に隠されているのだから。

あ、ミツルギは意気揚々と旅立った。あいつなら多分良い仲間を見つけて魔王とやらを倒してくれるはず。俺はそれを待とう。

「あー、ギルドのお姉さん?」

「ルナです」

「ではルナさん。いくつか聞きたいことが」

「何でしょう」

「モンスターと戦わないで済む仕事って斡旋してたりしますか?」

まずは衣食住。それを果たす為には金が必要だ。異世界だろうが腹は減るし喉は渇く。狩りには装備が必要だ。住処が無ければ休まらないし冬も越せない。冬があるのかは知らないが、働いて金を稼いで学んで衣食住を確保する。これが当面の目標だ。ニートとか一人の奴にできることでは無い。金のある親がいて、平和な環境で初めて成立するものだ。この世界でニートやろうとすりゃあひもじい思いして死ぬだけだ。そ

れは避けたいところ。いや、ぐーたらしたい訳では無いが俺すぐ死にそうだなぁ。
「そうですね…。壁の修繕とかいかがでしょうか?常時募集してますよ」
「なら、それで。即日行けますか?」
「大丈夫ですよ。では地図を渡しますね」
　異世界に来て最初のクエスト（?）が土木作業とはなぁ。いきなり討伐に走った所で死ぬだけだし、一攫千金は無理でも手に職付けるならこれで良い気がする。滅多にない経験したのだからこれくらい普通でいいんだよ普通で。

3話　モンスター？

「今日からお世話になります！カズマです！よろしくお願いします！」
「おう！よろしくなカズマ！俺はウォールだ。ここでは親方なんて呼ばれてる。まあ好きに呼んでくれや」
　地図の中には紹介状が同封されており、それを見せたら珍しい顔された。まあ、討伐とか採取とかと比べると冒険者っぽく無いからな。俺にとっては外の光景が新鮮で楽しみだが。
「お前さん冒険者なのに戦わなくて良いのか？」
「戦えないが正解ですね。無一文で文字の読み書き出来ないので。それに最弱職ですからね」
「最弱職って…。本当に弱い奴や適性が無いやつがなる最後の手段だぞ…。寧ろ稀少的存在なんだけどもなぁ…」
　おっと、最弱過ぎて稀少発言出ましたね。やっぱ適性無いやつが背伸びしてなるもんじゃないのか…。ステータス高めって言われたのになぁ。

「まあいい。俺は誰でも受け付けてるからな！ビシバシ行くぞ！」
「はい！」
壁の修繕か…。なんだか本当に某巨人の世界に来たみたいな感じだな。
ここに来たばかりだが、いきなり街中だったので壁の近くまで来ていなかったが、近くで見ると崩れかかっている所が何ヶ所かある。頑丈そうな壁でもモンスターの攻撃が加われば壊れる。ここは初心者の集まる街と聞いていたが、周りのモンスターのは本当に初心者レベルと言えるのか。やはり常に恐怖に囲まれているわけだ。戦いたくないなぁ。
しょっちゅうにそんなファンタジーな事を考えていたけど、あくまでゲームだからやり直せるのであって、現実はそうはいかない。これは遊びではない。どこかのキャラがそんなこと言ってたなぁ。ゲームだけど遊びではないと。ここは現実。ゲームですらない。やっぱ堅実に生きるのが良いんだなぁ。
「さっき教えた通りにやってくれ。分からないことがあったら周りに聞いてくれ」
「はい！」
これコミュ障にはきつい事なんだよなぁ。話しかけていいのか迷って結局何も出来ないと。
でもまあ、親方の教え方上手かったし、教えられた通りに修繕しよう。こう言うのは

事細かく喋ったところで需要ないからなぁ。専門的なのは知識不足で説明できない。ご都合に流すしか無いんだよなぁ。俺誰に何を説明してるんだろう。

…やっぱ単純作業になるんだなぁ。ずっと学校行かずに同じ事ばかり続けていたのもあり、単純作業は慣れてはいるが、社会人になってもそういった所は変わらないのか。異世界に来てからそんな事を知るとはなぁ。やはりリアルのコミュニティに触れないと世間から遅れてしまい、元通りにはならない。そんなこと知りたくなかったが、知らぬまま成人になったら本当に世間に入れなかっただろうな。まあ、戻る方法なんて分からないから関係ないか。

「おお！たしかカズマだっけか？お前この仕事経験者か？」

「えっ？いや、この仕事に限らず働くのが初めてです」

「すげぇ丁寧に出来てるじゃねぇか！初めてでこんな上手いやつ見た事ねぇよ！なにかコツでもあるのか？」

「い、いや。仕事のことだけ考えてただけっす」

どちらかと言うと、世間というのばかり考えてたけど。仕事からの派生だしな。

「真面目だなぁカズマは！俺なんか飯の事しか考えてねぇよ！ガハハハ!!」

世紀末に居そうなモヒカン頭の兄ちゃんに絡まれたと思ったらただの世間話だった。なんかこの街こんなモヒカンを定期的に見かけるのだが、もしかして世紀末だった？

「じゃあ頑張れよカズマ!ちょっとくらいサボるのが長く続けるコツだかんな?」
「は、はい!」
　でもなんか皆明るく過ごしている。娯楽が発展している様には見えないのに。何を楽しみに暮らしているのだろうか。俺はこうして外の景色を眺めるのでも充分楽しんでいるが、いずれは日常になり楽しみも薄れていくだろう。それまでにはなにかこっちで趣味や別の楽しみを見つけたいな。なんて思ってみる。

――――――

　昼休憩も挟み午後の作業に取り掛かる。こっちは季節で言うともう時期春になる時期らしく、昼でも涼しい。暖かくはない。ジャージだと夜は寒そうだ。そう言えば宿を探していない。部屋があるのが1番だが、野宿を覚悟する必要もあるかもしれない。
　どうしようかなぁと思っていると、さっきから一定の感覚の揺れが近付いているのを感じる。なんと言うか、大きいものが飛び跳ねているような感じだ。ふとそちらを向くと、２００m先にデカいカエルがいた。…えっ?デカ!?ざっと３m近くあるぞ…!?
「な、なぁ!あのカエルは何なんだ!?」
「ん?あんたジャイアントトードも知らないのか?家畜や子供くらいなら一呑みしちまうおっかねぇモンスターだよ!長い冬も明けかけてるから出てきてもおかしくないが、ちと早いかもな…。冒険者がいれば1発みたいだがよう…」

「あんなデカいのにか!?」
「まあ一応雑魚モンスターらしいからな。俺ら一般人じゃあ挑んだ所で餌になるだけだからな。ここは一旦逃げよう」
「お、おう」
　冒険者って、あんなおっかないのと対峙しなけりゃならねぇのか!?あれで雑魚モンスターなんて、俺には無理だ。俺なんてすぐ餌だ…。
「お前ら早く上がれ!気がつきやがったカエル野郎…!去年の秋、家畜の被害を抑えられた事が逆に仇になったか…。奴らの覚醒がいつもより早い!」
「でも喰わせておけば今度は俺らの飯が無くなっちまうじゃねぇか…」
「冒険者にとっては格好の金稼ぎでも、俺らには家族や家畜が掛かってるんだよ…。家計や暮らしに響いちまう」
「例年より早いからな。多分クエストも少なかったんだろうよ。これはギルドに報告しねぇと…。作業中止だ!」
　ゲームだったら、ミツルギの様にチートを持ってきてここに来ていたら。冒険者やってる俺が名乗り上げてる所なんだろう。俺が危機から救うと。だが実際はどうだ。俺は持たざる者だ。もしかしたら隠れた才能を持ってたりもするが、剣なんて握った事がない。少し厨二病やってたが俺は戦士じゃなかった。

俺は数時間前までただのニートだ。平和ボケして、家にいてゲームやって筋トレして勉強して、少し手伝いしていれば飯もくれたし、小遣いも貰えた。仕事も学校も行ってる訳でもないのに。

だがここではそんな訳にも行かない。身寄りが無い。金も無い。技術も無い。知人も居ない。そして勇気が無い。

俺は無力だと、現実を突き付けられた気分だ。

そりゃそうだ。ニートがチートになるのは二次元だけなのだから。

俺は作業中止の声を聞くと、直ぐにペアの奴と一緒に上がる。

「おい、早く上がってこい！死にてぇのか！」

「こ、怖くて…！妹のことを喰ったアイツらが…！」

「怯えてる場合か！妹と同じ目に遭うだけだぞ！」

「で、でも…！」

1組、竦んでいる奴がいる組があった。俺よりこの世界にいるのに、俺よりビビりかもしれない。でも、あの人は妹がアイツらの飯になっちまったのか…。トラウマそのものなのか。

何が初心者の街だ。何が雑魚モンスターだ…。某ＲＰＧのスライムだって、アイツに勝てない奴なんて俺の母さんくらいしか見た事ない。でもここではどうだ。毎年何人

も、何匹もアイツらに殺されている。これが現実だ。
「くっ…！今引き上げる！だからしっかりと捕まってろ！今にもカエル野郎が壁に突進しそうだ！お前ら！何人か手伝ってくれ！」
「わ、分かった！お、俺も手伝う！」
名乗りを上げると滑車を経由している紐を引っ張る。しかし奴らは刻一刻と近付き、それに連れ揺れも大きくなる。
「あ、ああ！ゆ、揺れる！」
「あんた！気をしっかりとしろ！親方が言うように死んじまうよ！」
「む、無茶言わないでくれよ！」
「新人の言う通りだ！トラウマだからって怖がるな！俺もお前も今命がかかってるんだ！死んで行った奴らに顔向けできねぇぞ！」
彼の相方が励ますが、最悪のケースと言うのは案外簡単に起こるものだった。
ドンッ！と遂にカエルが突進してきた。
壁の上にいる奴らはしゃがみながら壁に手を着いていたから落ちなかった。
しかし
「あああああ!!!」
「ユンケル！」

あいつ栄養ドリンクと同じ名前だったのか…じゃない！怯えてた1人が衝撃で手を離し、そのままカエルの口目掛けて落ちていった。

4話　蛙戦線

「ユンケル！」

　最悪のケースだった。考えられない訳ではなかった。考えたくなかった。想像したくなかった。見たくなかった。声をかけた人間が目の前で餌になる瞬間を。　ユンケルと言う人物はたった今、デカいカエルの餌になった。なってしまった。

「畜生！無力な俺じゃ人1人救えねぇ…長年親方やってるのに…！」

「ユンケルはな。カズマ。お前と同じで真面目な奴なんだ。仕事は丁寧だし、酒だって飲み過ぎないで抑えられる。病気の父親の代わりに家計を養おうと真面目に奮闘する奴だったんだ」

　まるでお通夜の雰囲気だ。死んだ仲間を悔やむかの様に…カエルに喰われた…。喰われた…？

「なあ、ひとついいか」

「カズマ…少しは空気を」

「アイツらってそんな人間をバリボリと喰うのか？」

「いや、歯は無いがアイツは人を丸ごと飲み込んじまう」

て事はまだ死んでない…！

「アイツらに弱点はあるのか…？」

「弱点って…お前アイツを倒すつもりか！？お前冒険者は冒険者でも最弱職の冒険者なんだろ！？」

「弱点があれば…最弱職の俺でも倒せる筈だ」

「弱点…アイツらの弱点って何なんだ…」

「金属が嫌いって学ばなかったっけか」

「冒険者が打撃が効かないって喋ってたっけ…」

「なんでもいい。情報をくれ」

一般人と、世間知らずの冒険者。一人一人満足な情報を持っていないが、三人寄れば文殊の知恵。日本の諺だがまさにこれを指すだろう。

纏めると

・打撃は効かないが、尖ったものが有効。

・金属嫌い。

・魔法も効く

この場で用意出来そうなのはなんだ…何がある。

「剣はねぇが、倉庫に鉈があるはずだ」

「斬れ味は」
「ちゃんと整えてる…でもいいのかよ。命懸けになるぞ」
　そうだ。これは命懸けだ。雑魚相手になに弱腰になっているんだって話だが。命懸けなんだ。命は1つしかない。全員そうだ。正直怖い。だが目の前で人が死ぬほうが怖いんだ…。
「俺はやる…俺がやらなきゃ、誰がやるんだ」
「カズマ…」
「…分かった。あのバカを連れて来い。ちゃんと生きてな」
「…！あぁ！」
　正直身体の震えは止まらない。死んでもおかしくないからだ。でも、俺は立ち向かいたいと思った。この震えは武者震いだと、自分に言い聞かせ、命を投げ出して。
「いいか。下につくまで土台から手を離すなよ！」
「分かってる」
　安全ロープなんて、恐らくこっちにはないだろう。さっきの作業の時は誰も付けていなかった。今だってそんな物ない。落ちて死ぬなんてダサい。だからこの手はどんな揺れが来たって離してはならない。
「降ろすぞ」

２０ｍと言えば、ビルで言うと約７階相当だ。高くてぶっちゃけ怖いし、ここからでもデカく見えるあのカエルも近付くとさらに威圧感を感じると考えると恐ろしい。

…そういや人を喰らったカエル、全然動かないな…人を食らってる間は動かないのか…？消化にどれだけ時間をかけるのかは分からない。ただ急がないと窒息ってのも考えられる。

よし、地面に着いた！

「行け！カズマ！」

…ッチ！想像以上のデカさだ。足がすくみそうになる…。気合い入れるぞと自分の頬を噛む。

「うおおおお!!!!!」

全員倒す必要は無い。１人を…奴を倒せればそれでいい。だが踏みつけられたらおしまいだ。簡単に死んでしまうだろう。飛び跳ねただけでデカい振動を与えるのだから。

新たな餌を見つけたのか、カエルは俺を目掛けて襲いかかる。まあ、飛び跳ねて近付いているだけだが。

「あああああ!!!!!」

だがまだ距離があるのが幸運だ。カエルの横腹目掛けて鉈で掻く。掻かれたところ

から生臭い血液が噴き出し、自分にかかるが知るもんか！
　腹から背まで掻っ捌く位に斬りつけてやると、目に見えてカエルは弱り、ユンケルを吐き出した。
「ゲボっ！ゲボっ！オエッ！」
　体液を纏っているのか、ユンケルはかなりヌメヌメしていて、噎せているが生きていたようだ。即消化じゃないのが救いだ…。
「立てるか！ここは危険だ！」
「ゲボっ！…新入り君、助けてくれたのか？」
「そうだ！早くしないと踏み潰されちまう！」
「うう…さっき落ちたので足を怪我して歩けないみたいなんだ…」
　いくらカエルの身体がブヨブヨで柔らかいからと言っても、かなりの高さから落ちちゃ、それだって命が危ないんだったな…すっぽりとカエルに喰われてたから考えてなかったが。
「なら無理矢理背負うまでだ！」
「む、無茶だ…。アイツら人間よりも早いのに！」
「関係ない！ここから街の入口まで距離があろうと関係ない！手を伸ばした先に助けなきゃ行けない奴がいるなら、命張って助けねぇと！」

救命にリアルもクソもあるか！目の前で人が死なれたら俺は死んでも後悔するだろう。

もし助ける手立てがあるなら、体張ってでも助けてやる！…ライトノベルの受け売りだが。そう考えると薄っぺらいな俺。ニートやってたしそんなもんか。

「どんどん近付いている…ってか新入り君速くない!? 人背負ってなんでジャイアントードより少し遅い程度なの!?」

「少し鍛えていたのと！火事場の馬鹿力って奴だよ！」

本気で、死ぬ気で、逝く気で走っているのにカエルはどんどんと近づくばかり。これじゃあ2人まとめて喰われちまう…！

速度を上げようにもこれ以上は無理だ…今俺の出せる全力で走っているが、入口は見えない。俺だって鍛えてる言ってもひきこもり。体力だって無くなりそうな所を自分に鞭打つように走っている。いつガス欠になってもおかしくない！

「新入り君！俺を置いて君だけ逃げて…君だけでも助かってくれ…！」

「何言ってるんだよ！俺が来た意味なんだと思ってるんだ！」

「このままじゃ2人まとめて喰われちまう！だから、せめて君だけでも！」

「馬鹿言ってるんじゃねぇ！2人で助かるんだよ！っとうわ！」

何が幸運値は高いだ…なんでこんな所で石に躓くんだよ…畜生！

死ぬ間際、冒険者らしい事は出来た。カエルを倒して、喰われた奴背負って逃げた。これだけでも引きこもりの俺には大冒険だったんだ。でも、俺はやっぱり無力だったみたいだ。転生して無双できるほど、現実は甘くなかった。異世界に来た。それはまさにファンタジーだろう。だがそれだけだ。ファンタジーが現実になった瞬間、俺の力は想像のものから現実のものへと下方修正される。

思えばちっぽけな人生だった。

小さい頃は友達と遊んでいた。なんなら幼馴染みがいて、結婚の約束だってしてた。ヤンキーに寝取られちまった挙句死んじまったがな。

そこからショックで体調を大きく崩した。学校にも行けなくなるほどショックだった。学校に行かな過ぎて友達は消えた。次いでに厨二病も卒業…なんだよこれ、これが走馬灯って奴かよ。死ぬ間際、本当にこう言うの見るんだなぁ…。日本に帰れた所で友達は居ない。迎えてくれる家族は…多分いる。ただのひきこもりだった俺を迎えてくれるのかは分からないがな。勝手に消えてったし。

もうゴールしても良いよね？

「ライトニングー！」

…え？

カエルに対して雷が飛び、そのまま黒焦げになった。一瞬だった。

「狙撃！」
　遠くから声が聞こえたと思ったらカエルの脳天に矢が刺さっていた。
「ふん！」
　カエルが悶えている所にすかさずに男が剣を振るうと、スっと刃が通り、カエルは一瞬にして絶命した。
　すげぇ…これが異世界…？
「大丈夫？怪我は無い？」
「あ、あぁ…俺はちょっと擦っただけだ」
「お、俺は骨が折れたかもしれない」
　いくら柔らかいカエルでも、高いところから落ちたんだ。怪我で済んだのが良かった。
「急いでプリーストのいる所に連れて行かないとな」
「俺が連れてくぜ。立てるか？」
「…なんとか、立つのが精一杯だよ」
「足は折れてなさそうだ。肋か…キース、悪いが２人で連れて行こう」
「そうだな。リーンは周辺の警戒を頼む」
「任せて！」

…俺は助かったのか?…生きてる。擦りむいた傷が痛いが、俺は生きているんだ…。

俺にも力があれば、あんな風に…。

5話　紅魔の娘

ジャイアントトードと対峙したあの日から2週間が経った。テイラーと言うクルセイダーが率いる冒険者パーティーに助けられたあの後からモンスターとは戦ってない。カエルが着々と目を覚ましてきてはいるが、冒険者にとっては格好の獲物なのか、対峙した時を境に冒険者が続々と狩り始めていて、一般人の被害は今の所は発生していない。

「カズマお疲れ。今日の日当、少し色付けといたぞ」

「ありがとうございます！」

朝の9時頃から夕方の17時。間に休憩1時間の土木仕事。この国の法律は分からないが、こう言ったところは日本と変わらないみたいだ。

日当は1万5千エリス。実働時間7時間と考えるとかなり良いような気もするが、危険と隣り合わせと考えるとそれくらいは貰えるのかと思ったりもする。

今日はいつもより3千エリスも多く入っていた。無一文だった財布も毎日働いて気付けば18万エリス。このお金が溜まっていく感覚がなんとも言えない。

朝起きて飯食って運動して働いて飯食って働いて運動して風呂入って飯食って勉強

して馬小屋に帰って寝る。

かなり健康的な生活をしている。いずれは家と家族を持って農家とか商売とかやりたいな…。

…って俺は冒険者なんだが…。めっちゃ人生満喫した気になってるけど、本業何もこなしてないのだが!?カエル1匹倒した物の買取で5千エリス。時間的にはたった数分でこれだ。ぼろ儲け…では無いな。完全に生きるか死ぬかの世界だったから。でも収入は普通に働くよりは良い。ちゃんと魔物を倒す力があれば。俺には無さそうだからそんな大冒険は出来ない。この初心者の街でぬるま湯に浸かり続けるだけだが、日頃の労働と運動と勉強を重ねた結果、ステータスが少しずつ上がっているのを見てそんな些細なことを忘れる。やはり筋肉が全て…。

この国の言語について勉強を重ねると、文字の形は違うが元いた世界と同じでローマ字の組み合わせで、文字を覚えると直ぐに理解出来た。

人生詰んだと思ってた所だから、本当に救われた。文字読めないと肉体労働しか出来ないし、本とか新聞とか何も読めずに新たな知識を付けることも自分一人じゃ出来ない。

少しずつ賢くなれた気がするから勉強は辞められない。やめない方がいいけど。

自分の話はこれくらいに。

最近街の外で大爆発が1日1回起きるようになった。誰がそんな爆弾を持ってきて発破させてるのかは分からないけど、折角修復した壁にもダメージが入っているから俺らの仕事が多くなっている。まあ、その分給与も増えてはいるが、ありがた迷惑だ。

いつもより忙しかったが、今日もひとっ走り行きますかね。

向こういた時からずっと日課にしていた。同級生とすれ違う恐怖もあったが、まあ帽子とサングラスしていたら気付かれる事は無かった。それはそれで寂しいが。

こっちに来てからはそんな変装する必要も無くなったがな。知ってる人誰もいないし。

城の外壁半周。かなり長い距離だがそれを走り続けていればモンスターからも全速力で逃げられる力が手に入りそうだ。努力すれば逃げる力を得られる。即死技や広範囲攻撃喰らったらたまったもんじゃないが、初心者の街でそんな事ないと信じている。

…ん？あれ？誰か倒れてる!?

「お、おい！あんた大丈夫か!?」

格好はかなり背が小さめの女の子だった。黒とんがり帽子に黒いマント。魔法使いっぽい風貌の子が地面に伏せていた。

「…お…」

「しっかりしろ！何があったんだ…」

「…お腹…」
「腹をやられたのか!?今すぐ教会に…」
「…お腹が空きました…カクッ」
…行き倒れか。でもこんな幼い子をこのまま見捨てるのも気が引ける。しゃあーねぇ。ギルドに運んで飯食わせるか…。
「よいしょっ…軽っ!?今まで何食ってたらこんなに軽くなるんだよ…」
女の子を背負うとその軽さに驚き、その後に幼くても女の子って柔らかいんだななんて邪な考えが過ぎる。流石に小学生くらいの子に手を出そうなんざ思えないがな。
「少しの辛抱だ。今すぐギルドに連れて行くから!」
「…申し訳ないです…」
今にも死にそうな顔をしている。ちゃんとご飯食べれないほどこの子の家は貧しいのか…?娘にちゃんとご飯を上げられないなんてなんて親なんだ…。良い親にちゃんと親孝行出来なかった俺が何を言ってるんだって話なんだが…。
ちゃんと食わせてあげよう。あんなに顔色が悪いんだ。貯金とかそんなの気にしてられない。
よし、ギルドに着いた。
「あれー?カズマさん今日は少し早い…ってどうしたんですか!?」

「ルナさん！この子凄いお腹空かせてるみたいだから、なにか直ぐ出せそうなのお願い！」
「は、はい！ただいま！」
　いつもお世話になっている女給さんが出迎えると、こちらに気づき慌ただしく裏に戻って行った。
「食えないものとか無いか？」
「…な、なんでも食べます。連れてきてもらってありがとうございます」
「礼はあとで受け付ける。ほら座ってくれ」
　席に着かせて向かいに座る。改めて見るが帽子から覗かせている黒髪に、赤い瞳、片方は眼帯を付けている。かなり可愛い子だった。
　カズマさんが中学生くらいで幼馴染みが居なかったら好きになってたかもしれないが、歳の離れた子はＮＧ。あんま邪な事考えるのは良くないが、歳の近い異性と話したのがかなり久しぶり過ぎてテンションが上がっている。
「お待たせしました！」
　いつも頼んでいるカエルの唐揚げとご飯。女の子用のご飯は山盛りにされていた。こんなに食えるのかなぁ、と思っていたが、匂いが鼻までたどり着いたのか、無我夢中で食べ始めた。

す、すっごい食欲…。
「お、おいそんなにガツガツすると喉詰まらすぞ。足りないなら頼むから、もっとゆっくり食えって」
「ゴクン。すみません。3日も何も食べていない物ですから…助かりました。なんとお礼を申せば良いのやら…」
「気にすんなって。腹減ってるだろうがもう少しゆっくり食べなきゃ」
「…我が家の食卓はいつも早い者勝ちでしたから、どうも癖で…」
「よく噛んで食べると食べ過ぎないし、満腹感が出るらしいぞ」
「そうなんですか！いや、でも私は食べます！」
あぁ、そう…。山盛りだったご飯も気付けば少ししか残っていない。
「図々しい事言って申し訳無いのですが…」
「お代わりか？気にするな。満足するまで食べな」
「い、良いんですか？…はっ!?何か私に要求が…!?」
「そんな事求めてないよ。要らないなら食べないでも良いんだぞ」
「要ります！あと3回くらいお代わりしたいです！」
こいつ俺の財布を破産させるつもりなのだろうか…。

「ふぅ…たっくさん食べました。こんなに食べたの初めてです…」
「…満足してもらえたなら、何よりだよ」
少なくとも1日働いた分は消え去った…。今日はシュワシュワ飲んでないのに…。この子本当に食べたなぁ…食べ尽くした?どこにそんな食べれる程の身体があるのだろうか…。
「そう言えば自己紹介がまだでしたね」
「あぁ、そうだったな」
女の子は立ち上がるとなんか決めポーズ取り始めた。
「我が名はめぐみん!紅魔族随一のアークウィザードにして爆裂魔法を極めし者!」
…この子中二病…?いや、彼女の言う紅魔族って言うのはこういう挨拶が主流なのだろうか…恥ずかしいが、ここは彼女に合わせる所だろう。
「我が名はサトウカズマ!最弱の冒険者にしてこの街の壁を護りし者!」
だせぇな。俺ここに来て土木作業しかやってないからな。他に説明しようがない。
「お、おおおおお!!カッコイイです!」
カッコイイんだ。なんか照れるな。これと言ったことやってないのに。
「里の外の人は白い目で見てくるのに…里の外の人で紅魔族の名乗りをした方はカズマが初めてです!もう1回!もう1回やって下さい!」

「決め台詞ってのはここだと言うタイミングでやるからこそ、カッコイイだろ?」
「おおお!!こんなに私のセンサーにビビっと来た人は初めてです!」
　すっごい喜んでる。中二病なんてずっとドン引かれてたから、本当に照れくさい…。取り敢えず紅魔族ってのは中二病を患った一族と言うのは分かった。
「ご飯も奢ってもらい、紅魔族の私を受け入れてくれるような甲斐性のある方はこの先見つかりそうにありません!…まさに運命の出会い!」
「本当に照れ臭いから…。まあ、喜んでもらえて何よりだよ」
　本当、こんなにも満面の笑みをされるとなぁ。消えたお金なんてどうでも良くなりそうだ。
「そう言えばカズマは冒険者なのですか?」
「一応な。2週間前に冒険者になってからカエルを1匹しか倒せてない」
「カエル…あのジャイアントトードですか?冒険者ならば小遣い稼ぎに倒しに行くレベルのモンスターですよ?」
　えっ、あいつそんなに冒険者の中では弱いの?俺大苦戦したんだけど。確かに鉈で簡単に斬られたけど。
「そのカエルで間違いない。初日に対峙してからモンスターを倒しに行ってない」
「最弱職と言われてますが、カエルを倒すのも苦労が居るとは…それで普段はどうやっ

て暮らして居るのですか?と言うかもしかして私は収入が無い人に集ってしまったのですか…!?」
「壁の修繕が俺の仕事だ。冒険者やってる時間より壁の手入れの方が遥かに長い」
何しろ1日8時間だからな。1日で討伐時間の16倍だ。
「だから壁を護りし者なのですね!」
「あぁ。最近は何処かの爆発魔が街の外で暴れて劣化以外の修復が多いんだけどな」
「…あ、あはは、一体どこの人なんですかねー」
「本当だよ…。あれ?確かめぐみん爆裂魔法がどうのこうの「あーっと!今日はお世話になりました!この御恩!絶対に忘れません!では!また会いましょう!」あっ、おい!」
あいつが犯人か…?魔法使い、そんなに強い力があるのか…。

6話　爆裂魔法

今日の土木作業は休みにしている。と言うかさせられた。昨日親方に「勤勉なのは良いがやり過ぎは身体を壊す。好きな時に働いて好きな時に休め」と言われ無理矢理休みを頂いた形だ。金を稼げる方法があるなら稼ぎたいのだが…。まあ、休めと言われたら仕方ない。

腹筋しながら考えておこう。既に５０は数えたが、多分１００になった頃には思いつくだろう。

しかし、いざ休めと言われても本を読む事しか思い付かない。冒険者なのだから狩りに行くべきなのかもしれないが、俺はカエル相手に苦戦する人間なのだから無理だろう。何がステータス高めだよちくしょう。どの職業になれるステータスだろうが、なれなきゃ意味ねぇよ…。

…もしかして、俺戦う術を持っていないのでは？

確かに、俺がやっていたＲＰＧだって、魔法を使うのには覚える必要がある。剣だって技や形がある。俺は何も知らないんだ。それを覚えれば俺にだってカエルを倒せるようになれるんじゃないのか…？

いや、馬鹿が。あんなデカブツどうやって相手しろって言うんだよ。無理だよ。引きこもりニートにそんなこと出来ねぇよ。
「あっ！カズマ！おはようございます」
「ん？めぐみんか？おはよう。元気そうで何よりだよ」
「カズマはこんなところで何してるんですか？」
「何って、仕事が休みになったから鍛えているんだよ。いざ戦えるようになれば死ぬ確率を減らせるだろうから」
「…カズマって服の上だと分り辛いですけど筋肉質ですよね。戦士とかやってもおかしくないと思うのですが」
本当なんで最弱職なんだろうな。
「ステータス見てみ」
「どれどれ…ってかなりステータス高いじゃないですか！なんで最弱職なんか…って何でしょうこのスキル。紅魔族一の頭脳を持ってしても理解ができないです。これどんなスキルなんですか!?」
「分からない。ギルドの人曰く呪いかもしれないだそうだ」
「呪い!?なんというカッコイイ響き！カズマの秘めたる力を封印するための力なのでしょうか！どこまで私を喜ばせるつもりですか!?」

本当、そうだったら良いのにな。プリーストに尋ねても解呪出来なかった代物だからな。俺が何をしたんだ…親以外に迷惑かけていたなんて事ないはずなのに…。
「…もしかして、訳ありなのですか？」
「…まあ、な。あんまり模索はしないで欲しい。正直俺もよくわかっていないんだ」
「そうなのですね…。カズマも随分と苦労しているんですね」
「そんな事はねぇよ。正直、前居たところでダラダラしているよりはかなり生活が充実してあいるよ」
働かなくてもご飯は出たし、遊びも沢山あった。何も不自由は無い生活だったが、こっちの不自由ある生活の方がなんかスッキリする。
「意外です。カズマってかなり勤勉なイメージありますから」
「俺、違う国から来たのもあって言葉が分からなかったんだ。こっちで楽しく生きるには学び続けるしか無かったからな。自然とこうなった」
自分の知らない事を知る事が楽しい事と知って以来、俺は暇を見つけては勉強するようになった。それよりも楽しいゲームに出会ったてそっちにものめり込むようになったが、勉強は欠かさなかった。本当に欠けてしまったのは友達付き合いくらいだったかもしれない。
「本当に苦労人なんですね」

　それほど苦労はしてないが。
「そうだ！カズマの冒険者カードを見る限り何もスキルを持ってないじゃないですか。この機会に何か覚えてみてはどうですか？」
「…そうだな。そうしてみようかな。どんなスキルがあるんだ？」
「色々ありますよ。その中でも私は爆裂魔法をオススメします！」
「そう言えば自己紹介の時にも言ってたな。どんな魔法か見てみたいよ」
「本当ですか!?言質取りましたからね！ではお見せしましょう！私の使う最強の魔法を！…街の近くで撃つと怒られるので場所を変えましょう」
　えっ、なにそれ怖いんだけど。やっぱ毎日辺りに響き渡る爆発の原因はこいつか？こいつなのか？

―――

「あの岩が良いでしょう！」
「かなりデカいが！あれも壊せるのか？」
「私の爆裂魔法にかかれば木端微塵ですよ！では行きますよ…！」
　空気の流れが変わった。めぐみんを中心に空気の渦が出来ている。
『黒より黒く　闇より暗き漆黒に　我が深紅の混淆を望みたもう。覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ！踊れ！踊れ！踊れ！我が

力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり。万象等しく灰塵に帰し、深淵より来たれ！』

めぐみんの足元には大きな魔法陣が描かれ、岩とめぐみんを包むように黒い渦が暴れ出す。側に立っている俺も魔法陣から吹き荒れる突風に構える。これが魔法…？

『これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法！』

究極の、攻撃魔法…！

『エクスプロージョン！』

魔法陣から飛び出た黒い渦の中で、星が輝いたかと思えば、岩を包むかのような爆炎が、空気を裂くかのような轟音を響かせた。その轟音は、衝撃は俺の肺の中の空気を吐き出させるようにぶっかり、少し噎せそうになる。

爆炎に包まれた巨大な岩は跡形もなく消し去り、そこには大きなクレーターが出来ていた。

これが、魔法。これが、爆裂魔法…。すげぇ、カッコイイじゃねぇか…。

「すげぇじゃねぇかめぐみん！…めぐみん!?大丈夫か!?」

褒め讃えようとめぐみんの方を向くと地面にバタンと倒れてした。

「しっかりしろ！めぐみん…」

「…爆裂魔法はその威力の強大さ故、こうして私の魔力の全てを使い尽くすだけではな

く、体力も犠牲にするのです」

…うん。まあ、そう言う物だよな。なんの代償無しに放てるような技じゃなかったからな。

「だから、放った後に立つことは出来ないんです。図々しくて申し訳ないのですが、街までおぶって貰えますか？」

「…それは構わないんだが、そんな代償を払うような魔法使ってちゃ身体が持たねぇぜ？今度は他の魔法見せてくれよ」

「…ません」

「えっ？」

声が小さくて聞き取れなかった。一体どうしたと言うんだ。

「使えません」

「えっ？使えない？」

どういう事だ？あんな強い魔法を覚えられるんだ。めぐみんも究極の攻撃魔法と言っていたし。

「私は爆裂魔法を極める者！他の魔法など邪道なのです！」

あ、これこだわりが強すぎるタイプの人間だ。

我が道を往く。カッコイイはカッコイイが…。

中々難があるぞこいつ…。
「でも身体が持たねぇって」
「良いのです。私は爆裂魔法に人生をかけているのですから。寧ろ爆裂魔法を放って死ねるのであれば本望！」
あ、ダメだこいつ重症だ…。紅魔族ってこういう奴ばかりなのだろうか…。
「…と言っても、これのせいでチームからはお払い箱だったのですが」
ダメじゃねぇか。
有効活用出来ないことは無いが、普段はオーバーキルが過ぎる。こだわりありすぎるのも良くないと俺は思うが、人の生き様に口を出せるほど俺は真っ当な人間じゃないからな。
「俺からは頑張れとしか言えないなぁ」
「カズマの仲間になれば活躍出来ますよ！」
「と言われても、俺はモンスターを相手にするのが怖いからなぁ。冒険者としてほとんど仕事しないのが目に見えてる」
「…そうですか。残念ですが仕方が無いですね。カズマにはカズマのやるべき事があります。でも見ててください！私の爆裂魔法が認められるその日を！」
カッコイイ生き方だと思った。

自ら籠の中に閉じこもり、平々凡々と過ごしている俺と違って確固たる信念を持ち、自ら茨の道へと進む彼女の生き方が。

7話　スキル

「カズマ、レベル1でスキルポイントを10も持っているのですか!?なかなか珍しいですよ!ちょっとしたスキルなら冒険者でも覚えられます!」

全てがダメな人間と思っていたが、そんな事は無いみたいだ。それでも有効活用出来るスキルはこれを全て使わないと取れないと言うのだから悲しいところだ。

「私のスキルカードを見てください。爆裂魔法の所が黒くはっきりと書かれているでしょう。それが覚えているスキルで、下の薄くなっているものが覚えられるスキルです。ここではタッチしませんが、この薄くなっているスキルを押すと、スキルポイントがあれば覚えられるのです」

ここに来て最初、文字の勉強から始めた為読めないという事はない。と言っても訳分からん呪いは未だに解読できない、と言うかギルドの人も解読できていないみたいなのだが。

「ではカズマの冒険者カードを見て…カズマカズマ。私の目の錯覚では無ければ薄くなっている文字に『爆裂魔法』って書いてあるように見えるのですが…というか他にも

色々ありますね。ほとんど冒険には使えそうにないですが。教えてもらったのに習得してないんですか?と言うか爆裂魔法教えてもらっていたのですか!?」

え?教えてもらったの?いつ?

「いや、誰かに教わった記憶は無いぞ。それに爆裂魔法だって今初めて見た…」

料理、裁縫、読唇術、ライトニング、狙撃、片手剣スキル…どれも知らないスキルだ…。いや、最後の3つは見たことあったっけ…あれで理解したというのか、俺の頭脳は…。

「…いや、俺の中で秘めたる力の片鱗かもな」

「ほわわわ!何ですかそのカッコイイ台詞!紅魔族でもそんなカッコイイ事を実践出来る人は居ないですよ!」

まあめぐみんを喜ばせたからいいか。

でも憶測だと、この読めない呪い。実は呪いじゃなくて何かしらのスキル・素質だと考えると辻褄が合うかもしれない。見たスキルを覚えることが出来るって考えると、それって強いのでは?ボスクラスの相手の技を見ること出来たら覚えられるんだろ?冒険者だから。

「この中でオススメなのはライトニングですね。雷の中級魔法です。カズマは魔力も知力も高いので覚えれば使いこなせる筈です!」

「中級魔法は一式で覚える方が、単独で覚える場合よりもスキル消費の効率は良いのですが、単独で覚える場合ですと、本職でもスキルポイントが5必要なので冒険者のカズマが覚えると恐らくスキルポイントを全て使うことになります」

なるほど。そこそこ強いスキルに振るか、満遍なく取るか選べばいいのか……あれ？

「ライトニング、スキルポイント5で覚えられるぞ」

「カズマ？流石にすぐバレるような嘘は紅魔族の感性には引っかからない…って！えぇ!?ナンデ!?」

あれ？俺もしかして

なんかやっちゃいました？（笑）

「カズマ本当に冒険者なのですか!?ウィザードの間違いではないんですか!?」

「え、いや、俺だって最初はアークウィザードになれると聞いてなろうとしたらエラーが起きてなれなかったんだぞ？冒険者にしかなれなかったから冒険者になったんだ」

「…もしかして、カズマの呪いは呪いじゃなくて加護なのでは…!?」

加護って、スキルの上位のあれか!?敵とかＲＰＧの主人公が持つあれか!?いやいや、冒険者にしかなれない加護ってそれ呪いちゃいます？

確かに、普通なら沢山ポイントを使うところを使わない。そしてそのポイントが沢山手に入りやすい。それなら確かに加護とも言えるが…。

「なら勇気の加護とかが欲しかったなぁ…」
「どうしてですか？加護持ちってだけで王族と並ぶのですよ？」
「まだ決まった訳では無いがな。いや、どんなにスキルを持っていたってよ。勇気出さなきゃカエル相手にすら出来ないからな」
カエル、怖い。死ぬか生きるかの戦いを肌で感じた俺は恐怖に駆られた。あの時は無我夢中だったが、間違えたら共倒れだった。あの時の冒険者が来なかったら俺は死んでいた。
だから勇気が持てない。人間死んだら何もかも終わりだ。ミツルギみたいな転生パターンもあるだろうが、そう上手くいくことでは無さそうだ。
「えー、そこはやる気を出すところですよ」
「1度死にそうになってるんだ。そんな無鉄砲な事したくないね」
身体を張るのは偶にで良いんだ。そんな易々と命張ってられるか。
「ステータス的にそう簡単に死なないとは思いますがね。でも、覚えておくのに越したことはないですよ！」
「…まあな」
魔法とか、使えたらかっこいいとは思うが。実用的な魔法があれば覚えておきたい。
取り敢えずめぐみんもオススメしている事だし、ライトニングに5、片手剣、料理、裁

縫、読唇術にそれぞれ1ずつスキルポイントを振り分けた。
「これで俺も魔法を使えるんだな」
「そうですよ!·これで立派な冒険者です!…冒険に役立つスキルが2つだけってのは冒険者的にどうかと思いますが…」
使う機会なんて要らないが、自衛の手段にはなっただろう。それより手に職つけた方が良い気がするし、情報が俺には必要だ。
「職の幅が広がったな」
「ねぇカズマ。あなたは冒険者ですよね? 料理人とか家政夫にでもなるつもりですか?」
「それ良いかもな!·美味い飯食べさせて喜んでもらえればめっちゃ良い!」
「なんでしょう。まともな事言ってるはずなのにこの場違い感…!」
おいそこうるさいぞ。
ニートやってた人間が社会貢献出来る良い機会なんだぞ!·ようやく社会的地位を水準に戻せるんだぞ!·こんな機会逃してたまるか!
「早速仕事探してくる!·親方には毎日来ないで休めと言われたが落ち着かねぇ!」
「カズマ!? 仕事には休みがあるのですよ!? 何をそんなに張り切っているのです!? 身体壊しますよ!?」

「うるせぇ！今までだらけていた分やる気は有り余ってるんだよ！」
「落ち着いてください！それ他の人より身体壊しやすいです！って力強っ!?何がカズマの心を駆り立てているのですか!?」
　この後俺たちはギルドの人に怒られました。

―――

「なんで私まで怒られなきゃいけないのですか」
「俺も落ち着いたよ。後で落ち着いて仕事を探すよ」
「まずは仕事を頭から取り除きましょう。本当に身体悪くしますよ？」
　まあ、確かに外では過労死が問題になっているが、なんか今の俺生命力とやる気がすっごい溢れてるから無駄にしたくないんだよなぁ。
「カズマって本当に怠け者だったんですか？」
「引き篭ってゲームに本気出してたって考えると怠けては居なかったな」
「それを怠け者と言うのですが…1人でゲームですか？私の里にそんな事やってる憐れで可哀想なボッチが居ましたが…カズマも同じ…？」
「オンラインゲームやってたからな。ネット繋げて遠くの人と遊んでた」
「おんらいん…？ねっと…？なんの事か分からないんですが、網を繋いでゲーム出来るものなのですか？」

あ…そうか。異世界にそんなものは無いんだっけか。ゲームはあるが流石にネットとか繋ぐのは無いか…。ミツルギみたいに日本から飛ばされるのがたくさんいれば広まってそうだがなぁ。

「説明が難しいが、それを使えば遠くのヒトとやり取りできるんだ。注文したものが届いたり、お喋りしたり」

「凄い技術ですね！カズマの住んでいた所はかなり高度な文明を築いていたのですね！」

ここは電気も水道もあるが、科学的なと言うよりは、魔法とかそういったものだった。俺のいたところでは逆に魔法を見なかったが。こういう所は異世界のご都合主義的な場面を感じる。本当だったら伝染病に劣悪な水周りと酷く生活環境の発展が無いものなのだが。マジモノの中世時代に飛ばされたのなら本当に祈るしか無いからなぁ。水道サイコー！科学に魔術サイコー！現代人でよかった！

8話　魔法

今日も仕事終わり。冒険者に役立つスキルとして初級魔法一式を教わった。殺傷力は弱いが火に水と中々に便利だ。1ポイントで全属性使えるとは正直思わなかったが。

『クリエイトウォーター』

手に軽く水の塊を創り、それを飲み込む。

魔法で創られた水は川の水を飲むよりもかなり清潔で、こうした仕事終わりの水分補給に向いている。魔力も時間が経てば回復するし、砂漠に行っても水には困らない。

「なんか…地味ですね」

「うっせ…」

どこからやってきたのかめぐみんが今日も現れた。懐かれたのか…？飯を集りに来たのか…？

「里の魔法使いで初級魔法を習得した者は居なかったですね。覚えるスキルポイントが勿体ないって」

まあ、殺傷力無いのはあんまり役に立たんからなぁ。なら背伸びして中級魔法を覚えた方が良い。それは真面目に普通の冒険者をやっているものだからだ。

俺は残念ながら普通では無かった。弱過ぎた…。いや、弱くないはずなんだけど。
絶対役立ててみせる。てか水と氷の複合とか絶対行けると思うのだが、だったら中級とかの方が良いのか…。中級魔法にも様々あるらしいが、俺はライトニングしか知らないし、見たことがない。
「ただただ強いだけじゃ意味が無いだろ。結局は相手との知恵比べ。その時に有利な手があれば俺にだってどうにかなる…と思っている」
「倒せないんじゃ意味無いのでは？」
「俺が生きて逃げれれば問題無し！」
「爽やかに笑っているところ申し訳ないのですが正直ダサいです」
俺もかっこよく勇者とかやってみたかったがなぁ。放浪者から実業家への成り上がりもありかもしれない。
「俺は俺なりに出来ることをやるだけだ。ここに来て色々やってみたいなって思ったからな。お前も大人になったらやりたい事いくつか見つかるだろ。言うて俺も１６だからまだまだ若造だが」
…あれ？なんかめぐみん雰囲気変わった？なんか空気がピリッとする…もしかして怒らせた？どこにそんな要素があったのか…？
「カズマ、もしかして私の事をずっと幼い子だと思ってましたか？」

「え？違うのか？良くて１２とかくらいかなぁと。成人には遠いだろ？」
「…カズマは他の国から来てたんでしたね。よく聞いてください。私は今年で１４歳になります。１４歳はこの国では成人です。なのでカズマとはさほど歳に変わりはありません。私は！子供じゃ！あります！せん!!」
「お、おう。悪かった。悪かった」
　めくみんってそんな歳離れてないのか…。でも、確かに病院に罹った時、１５からは大人分量でやってたな。あれは二次性徴を迎えた時に肉体的に大人になったからだっけか？そう考えるとちょっと早い気がしないでも無いが、成人と言われても納得はできる。他の国だって１８とか基準は違うんだ。これは失礼なことを言ったな。どう見てもロリっ子なのに…。
「おい、今失礼なこと考えてませんか？」
「いやぁ？なにもぉ？」
　なんで読まれてるんだろうな…。おっそろしい紅魔族。
「そういや俺の事ばかり話してたがお前の方は聞いてなかったな。あれから仲間は見つかったのか？」
　めぐみんは向こうでそっぽう向く。おい目を合わせろ。
「やっぱダメそうか？」

「…今日は役に立ちましたよ。荷物持ちでしたが」

何だか悲しいな。俺的には荷物持ちして報酬が入るのであれば願ってもいない事だが。ただめぐみんはプライドとこだわりが高いからな。

「どうせ果てるなら思いっきり爆裂魔法を撃って果てたいものですが…どうしてここまで誰にも分かってもらえないのですかね」

「めぐみん…」

そりゃあ、あんな1発技しか使えないとなぁ。と言えりゃ簡単だが、めぐみんの思い詰めた表情を見るとそんな事も言えない。

魔法って便利なものだなぁと漠然と考えていたが、その魔法ですら悩みを持つ者だって居るんだなぁ。なんて思ってしまう。

1人で使える技だが、その後1人になってしまうと、まあ想像がつく。道中お荷物判定されたらそれこそ死活問題だ。でっかいカエルの餌になっちまう。

そう言えばめぐみんの家は何時ぞや貧乏とか話していたな。…そっか。家に仕送りしないとなのか。

自分の在り方を決めるのは簡単なのかもしれないが、家族という足枷が付いた彼女にはさらにお金もいるってわけか…。

今日を生きる為だけのお金を稼ぐ俺とは違い、家族思いと言うかな…。

プライドなんて、捨てるのは簡単だ。その後の人生楽しいかと聞かれたらなんとも言えない。めぐみんもそれをわかっているのだと思う。だとしたらこんな葛藤した姿を見せることはないだろう。あんな高火力の技を使えるんだ。きっと彼女なら他の魔法だって使いこなせるはず。

お金を稼ぐのは彼女にとっては難しいことではない。

「爆裂魔法は、小さい頃の命の恩人が使っていた技だったんです。初めてそれを見た時から私は爆裂魔法の魅力に取り入ってしまいました。恩人のようになりたい。あの人に成長した姿を見てもらいたいって…頑張ってるんですけどね」

彼女は儚く笑った。その寂しそうな笑みは、手を伸ばせば届きそうなのに、俺は彼女に手を差し伸べる事が出来なかった。

彼女の技は、絶対に役に立つ。使い所を間違えなければ必ず役に立つと言う確信を俺は持っていた。戦術だけでは勝てない相手だって中には居る。それを考えれば彼女の技は必須と言っても過言ではない。使い道は少ないから、本当に切札なのだが、そこはご愛嬌。

難しいな。魔法。もっと簡単に使えるものだと思っていた。レベルアップしたら貰えるとか。

経験値とレベルの概念はあるが、スキルは誰かに教えてもらい初めて習得の条件を満たす。

まあ、これについては見ただけで技を覚えられる才能？加護？を持っている俺だから、かなり簡略化出来るが。

蛇足が過ぎた。

スキルは使えば使うほど技術があがるらしい。爆裂魔法も使えば使うほど威力があがる…やだぁ。修理箇所多くなるぅ～。考え直して？

残念ながらそんな事は出来ない。

そんな手のひらクルクルっとさせる人間信用に値しない。爆裂魔法を撃ち込まれてそのまま心中か、俺だけあの世行きか。死ぬの前提かぁたまげたなぁ。

パーティーを組んでいる男女の騒ぎ声が響き渡るギルド。この光景にもなれた筈なのだが、俺と隅っこにいる黒髪の女の子はただ1人で過ごしている。あの子は爆裂魔法の衝撃が響き始めた頃からここにいるし、もしかしたらめぐみんと同郷の人間かもな。

最近はめぐみんと居ることが多かったのもあるが、1人ってこんなに周りの声が頭に響いたんだと改めて感じる。

学校にも通わず、1人で遊んでいたんだ。これくらいなんて事ない…と思いたいが、少し味気ない気がする。

周りで楽しそうにしている冒険者が羨ましい。
俺も冒険者だが、何も成せていない。壁の中に引きこもり、弱い弱いと口に出しやっている事はアルバイト。働いているだけマシかなと思っているが、こうして振り返ると家にひきこもっているのとあんま変わらない。結局1人だ。
…なんだか気分が落ちてきた。外でも眺めるか。
この世界にも星はある。ここは別世界の地球なのだろうか、はたまた地球とは違う世界なのだろうか。日は昇る。お日様とは聞くが太陽とはこの世界ではまだ聞いてない。
異世界が地球上の話とは限らないだろ？
…でもそうなるとどうやって日本にいる父さんと母さんに会えばいいのだろうか…。
心配、しているのだろうか。突然消えたダメ息子を。朝っぱらからゲーム買いに行って消えた息子を。それとも、俺は外では忘れられた、もしくは居ない存在なのだろうか。
なんだか、すげぇ寂しくなった。
周りの人に助けられながら過ごしているが、こんな胸の内を話す相手など、いなかった。
夜はこんなにも心が弱くなるものだったのか。ゲームやってた時はそんな事も気にしなかった。
壁の上から外を眺めると、人どころかモンスターの姿も見えなかった。夜行性のモン

スターも居るかと思ったが、今日は居ないのか、明かりが無いから見えないのか…。
だからか余計星が見える。俺の存在はちっぽけなんだと、思えてしまう。
どこか俺は思い上がっていた。異世界無双など諦めていたが、まだ俺には隠された才能がなんて思ってたり。
そんな事は無かったんだな。
平凡だから、だから身体くらい強くなろうと鍛え、頭良くなりたいから勉強した。
逃げ足は鍛えられたが、肝心な時に転ぶ。
この世界でも春を迎えた。それでも夜はまだまだ寒い。こんな寒いのに、何故か生暖かい風が吹いた。遠くが燃えたと思ったら、風が来る。衝撃波は感じなかったが、俺は何となくめぐみんかなと思った。ここら辺であんなの使えるのはあいつくらいだ。
でもなんでこんな時間に…まさか。
俺は拭えない最悪のケースを感じ、思わず壁にかかったロープで地に降り立ち、駆け出した。

9話　トモダチ?

爆裂魔法は捨て身の魔法だ。
並の者には発動さえできない。
上位クラスの魔法使いが初めて魔力を使い切って発動できる魔法だ。
魔法を使い切った後は地に伏す。
これが俺の知っている爆裂魔法だ。
俺の中ではめぐみん以外に使い手を知らない。
…その爆裂魔法が遠くから見えたんだ。
他のスキルを疑いたかったが、俺のスキルに爆発なんてものは追加されていなかった。
――――どうせ果てるなら思いっきり爆裂魔法を撃って果てたいものですが…どうしてここまで誰にも分かってもらえないのですかね――――
あの時めぐみんの表情は悲しそうだった。
でもそれが覚悟に変わったとするなら…
あいつ、魔物に喰われる覚悟で放ったのか!?

あんなに笑顔で出された飯を美味そうに食べ、家族の事を話している時にどこか優しい笑みを浮かべ、我が道を進もうと強い意志を持った
そんな女の子が、魔物に喰われて死ぬかもしれない。
俺の数少ない知り合いの女の子。
いや、この世界に来て1番仲良くなった女の子だ。
俺は何故、冒険者なのにチームを組んであげられなかった。彼女を取り巻く環境、俺にはわかっていたのに。
俺はただ強く後悔していた。
死んで時間が巻きもどるなら、俺はこのまま首を魔物に差し出してやる。
もし彼女を救えるなら、俺は裸でもなんでも駆け出してそのまま牢屋にぶち込まれてやる。
…彼女の死に様をみるなら、俺は自分の頸動脈に爪を立ててやる。
俺の覚悟は決まった。彼女が命を張って、自分が何をすれば良いのか初めて理解した。
弱音なんて吐いていられねぇ。剣がないなら拳しかない。殴る為に使ったことは無い。魔法は一つだけ。
まさに背水の陣だ。生きるか死ぬか。

そんなの構ってられない。
俺は誰かが死ぬのが怖い。
この世界は、前の世界よりも命が軽い。
自衛の手段を持たない者は魔物の餌に成り果てる。それが恐ろしく怖かった。次は自分だと言われているみたいで。自分じゃなかったら、お前の周りの人だと…。
…畜生！めぐみん！どこだ!?どこにいるんだ!?
爆発の方角的にこっちで合っているはず。
どこにいるんだ…めぐみん…。
…見えた！抉れた地形！爆裂魔法の痕跡…。
めぐみん…ッ!?
「グルルルル…」
嘘だろ…。想像したくなかった。出会いたくなかった。それでも、頭を過ぎる光景には
魔物の姿が居た。
狼の群れだった。ざっと１０か…それ以上。めぐみんは倒れているままで反応は無い。…暗くて分からんが、血の匂いはしないし恐らくまだ傷は無いはず。
めぐみんを助けるには…俺があの群れを倒すしかない…。魔法は初級魔法とライト

ニングだけ。剣なんて持ってないから片手剣スキルは使えない。他は日常生活に役立つ物、ここでは使えない。

使えるのは魔法と拳、落ちている石。

それ以外は使えない。

「使うしかねぇ…！決まってくれ！『ライトニング！』」

魔法を出す感覚は水を出す時になんとなく掴んだ。このコントロールで上手く当たってくれればいい…。

「ギャン!?」

放たれた雷は1匹に命中し、絶命した。

手の中でバチバチしている。

俺の手から雷を放ち、当てた。それだけだ。

それだけだが、俺はどこかやれるなんて思った。

「もう1発！『ライトニング！』」

真っ暗闇、月明かりと爆発後の燃えカスの灯りを頼りに雷を放つ。命中したかどうかはよく見えない。耳を済ませる。ザザザっと枯葉を掻き分けるように何かが素早く動いている。正直目で負えない。

どこだ…どこにいる…？

「グルゥア!」
前ッ…!?と気付いて避けようとしたが避けきれず、静かに、そして熱く灼ける様な痛みが腕を襲う。
「あ、あああああああ!!!!」
痛い
痛い
今まで感じた事の無い熱さと激痛が腕を襲う。
擦り傷、なんて生易しいものでは無い。
パックリと裂かれた…ッ!
「はあ…はあ…ッ!ああ!痛てぇよぉ!!」
血が腕を伝う。裂かれたところからは血が泉の如く垂れ流され、熱いのに自分の身体が冷えていく感覚がする。
「ち、畜生がぁぁぁ!!!『ライトニング』『ライトニング』『ライトニングゥゥゥ!!』」
出せる限りの力を振り絞る。もはや空元気でしか無い。思考が落ちていく。熱い、熱い。なのに寒い、寒い。身体の底から震える寒さ。止血しないといけないが、この傷、どう止めれば良いか分からない。
血の臭いで誘えないか、と考えたが足から力が抜ける感覚がする。

冷や汗が止まらない。息も苦しい。
寒い、寒い、熱い。
人間って、血の２０％を失うとやばいんだよな…。…ははっ、血が止まらねぇや…。
「ライトニング…ライトニング…」
狙いが定まれない。狙える気がしない。もはや運頼みの魔法だ。最初に全力で放ったものよりも劣っている感じがする。
「ライトニング…うっ…」
脱力感が酷い。血が無くなってるのか、魔法を使い過ぎたか…畜生。耳を澄ませばまだ４匹は残ってるのに…。畜生…ちくしょう…。
助けたいと思った。救ってあげたいと思った。
彼女の生き方が、羨ましかった。
目指すべき人が居て、目標を、信念を持って、周りに流されずに、自分の目指すべき姿に一途に取り組んだ。
俺とは大違いだった。
目指すべき理想像も、目標も新年も無い。結局は流され、ただ逃げるように何かに打ち込もうとした、ただの臆病者なだけだった。
そんな俺でも、彼女を救いたいと思った。

どこか同情してたのだと思う。
慢心もあっただろう。
彼女の事を救える。救えるのは俺だけなんだ。
自分はつくづく弱い人間だと自覚したのにこれだ。
笑っちまう。能力だけじゃなくて、人間としても弱かった。そりゃあ、引きこもりやってたらそうなるよな…。
もう力が入らない。後はめぐみんと仲良く食われて終わっちまうのだろうか。思いの外呆気ない異世界人生だった。
めぐみんだけでも、助けられたら、良かったのに、なぁ…。
俺は悔しさを胸に、意識を手放した。
その後に現れた誰かに気付くことがなく。

眩しい。目に差す光に不快感を覚え、俺は目を開ける。あんだけ血を流したのだか

ら、ここは死後の世界と言うものか。
…それにしてはなんだか生活感のある部屋だ。
棚に並べられた本は、時々他の本を巻き添えに倒れている。輝いた空間で、それでいて殺風景な雰囲気を予想していたが、それは違ったみたいだ。いや、死んでないかもしれない。
奇跡が起きて、誰かが助けに来てくれて、俺の命は助かったのかもしれない。
でもそれだとめぐみんはどうなったんだ…？
なんて考えていると扉が開く音がした。
音のする方向を見てみると、めぐみんに似た黒髪に紅い瞳を持つ。それでいてめぐみんより大人びた雰囲気の女の子がそこにはいた。
…あれ？この子見たことあるぞ？
「君はよくギルドに一人でいる…」
「えええ!?そ、それは間違って無いですけど…私そんなイメージ持たれてるんですか!?」
大人びた雰囲気は、一瞬にして去っていった。
やっぱこの子ギルドにいるぼっちの子だ。
「あまり他の人と一緒にいる所見ないからさ。それでいて集団を見て羨ましそうにしている」

「うぐっ。み、見てたんですね…あはは…」
　こんだけ可愛いのに…。多分、なにか悪いんだろうな…。めぐみんと同じく。…そうだめぐみんだよ!
「なあ、めぐみんは!めぐみんは無事か!?」
「お、落ち着いてください!めぐみんは無事ですよ!あなたのおかげでめぐみんは無傷です!」
「そうか…良かった…」
　よく見ると俺の腕には包帯が巻かれていた。
　しかし、痛みは感じない。あの時は痛みで意識が飛びそうになったと言うのに。怪我の治りが早くなったのだろうか?
「腕の怪我はプリーストの方がヒールをかけてるので、もう治っている筈ですよ。1歩間違えれば壊死して片腕だけってのも想像がついたみたいですが」
　何それ怖っ。でもそうか。微生物やら寄生虫やらが体内に入り込んだらそれこそ病気や怪我に繋がるもんな…。
「カズマ!目を覚ましたのですね!?」
「めぐみん!無事だったか!」
「はい。カズマのおかげで私は無事でした」

良かった。これで救えなかったら俺は自らカエルの餌に成り果てるところだった。
「ただ、俺が倒れた時、まだ5匹くらい生きてた気がするんだが…」
「それについては私が倒しました」
「君が倒したのか?…君は強いな」
やっぱ、本職の人って強いんだなぁ。
「カズマさん、でしたね?」
「あ、うん。カズマです」
「私はゆんゆんと申します。めぐみんと同じく紅魔族の者です。私のライバルを…友人を助けて頂きありがとうございました」
「ゆんゆん…」
なんとなく紅魔族の子だと思っていたが、そんな魔法のエキスパートがポンポン初心者の街に来るものなのか…?
「…貴方私の友人だったのですか!?」
「もぉぉぉぉ!めぐみんのバカァ!!」
えっ?そっち?ねぇ何だったの今のしんみりとした雰囲気。全てぶち壊しじゃねぇか!
「折角助けてあげたのに!その仕打ち酷くない!?」

「わ、私はあそこで死んでも問題無かったのですからね!?」
　あれ?それじゃあ俺骨折り損って事になるのだが。
「ちょ、めぐみんそれはカズマさんに対して失礼じゃ…」
「……あっ」
　めぐみん…ゆんゆんに対して何故か攻撃的なのだが、一体何故…ああ、そういう事かと俺は胸元を較べて結論を出す。
「まあ、めぐみん。君にだって未来があるよ」
「おい、今私の何を見てそう言った」
　まあ、でも
　俺はこんな感じの
　騒がしい日常がもう一度
　欲しかったのかもしれない
『よしお前ら!街に出かけて冒険だ!』
『みんな!カズマに続けーー!』
　ガキの頃は楽しかった。何かに追われることも、去られて傷付くことも無かった。
　でも、傷付いて手に入る物も、あるのかもしれない。今回は物理的な傷だったが。
　…口では友達じゃないとか言ってたが、喧嘩しているその口は笑っているじゃねぇ

か。

ったく、素直じゃねぇな。

１０話　冒険者

あの時の狼はどうやらかなり強い個体だったらしい。６匹倒していたらしいが、１匹あたりの報酬が５万。カエル５匹倒した報酬よりも高く俺の財布は更に潤う事になり、５０万エリスも目前。経験値も溜まりレベルが４つ上がってレベル５まで上がっていた。財布も厚くなり強くなった気がするのは嬉しいものだ。スキルポイントも８貯まっているから、レベル上昇で２つポイントが手に入る計算だった。あれ、俺なんかやっちゃいました？

と言いたいが調子乗ると死ぬのが目に見えているから、まずは剣の動きなど、戦闘について慣れる必要がある。前回は完全に初心者過ぎた。剣も持たずに魔法だけで対処しようだなんて無理がありすぎた。前衛、後衛と居るからこそ魔法の有効性が確認できるのだ。魔法単体じゃ隙だらけだった。この発言はめぐみんとゆんゆんに喧嘩を売る為心の中で閉まっておくことにする。

大振りすぎる攻撃は威力こそ大きいが、隙だらけになる。かと言ってスキルに任せた攻撃だとラグや規則性が生まれる事が想像に容易い。強者とぶつかった際にそのスキルというのが慢心になるだろう。何事も経験を積むしかない。法則で許されるのは

ゲームの世界だからだ。現実にターン制など存在しない。単純なモンスター相手なら通用するかもしれないが、ボスレベルと対峙してしまった時には役に立たない。

動かぬ的（木）に向かい斬撃を繰り返す。

どの手段がバランスを崩さず、それでいて強くダメージが入るか、木に刻まれた傷の深さによって判断する。

別に俺はこう言った経験者ではない。本職から聞くのが1番かもしれないが、ここは初心者の街。そう言った期待はしない方が良い。

「カズマさんって真面目な方なんですね」

「あれで元々怠け者と言うのですから信じられませんね。ところで何故ゆんゆんが居るのですか？」

「めぐみんのいじわる！ちょっと混ぜてもらってもいいじゃない！」

ギャーギャーと喧しい騒ぎ声に対して頭が痛いぜ…。今日はこれくらいにしておこう。

「お前ら騒ぎすぎだぞー？」

「ゆんゆんのせいですよ」

「私!?」

お前ら以外どこにいる。とは言わないお約束。

察しろよお前、そこの眼帯ロリっ子。
「そ、それよりもクエストに行きませんか？体動かさないと鈍ってしまいますから！」
クエストか…。
「悪いがクエスト挑んだことは無いんだ」
「え？嘘ですよね？カズマさん」
「嘘のようで本当のことですよ。カズマの職場は壁修繕ですから」
本業は冒険者だけどね！
日を過ごせるくらいは貰える。正社員にならないかと話が定期的に来るからもういっそ乗ろうかなぁとか思わなくはない。
「それなのにあの一匹狼の群れに挑んだんですか!?」
あれどう見ても集団だったよね!?どこが一匹狼なんだよ！
「一匹がかなり強い個体のことを一匹狼と言うのですよ」
それ意味間違ってねぇか!?なんだこの世界。
はぁ、なんでこんな世界に来たんだろうなぁ。
社会更正は出来ているのだから、遠くにいる両親も厄介者が消えたと喜んでいるのかもしれないが。
「うん。まあ、あれだ。行ってみるかクエスト」

「えっ？良いんですか？」
「俺はお荷物かもしれんがな。チャレンジしてみるよ、冒険者」
「お、お荷物なんてそんな」
「行きましょう」
　正直、俺にそんな力があるとは思えない。元はと言えばニート。ただ家に引こもるだけではなく、少し過度な運動と数時間程度の勉強、そしてゲーム。普通の人が働いている時間、学校で勉強している時間を好きなことをする為だけに、トラウマを盾のようにして甘い蜜を吸い続けただけの、平凡以下の人間だ。
　でも
「めぐみん、やけに乗り気じゃねぇか」
「それはそうですよ！カズマなら、私の爆裂魔法を活かしてくれると信じていますから」
　でもまあ、こんなに期待してくれる子がいるなら、また頑張ってみるのも良いかもしれない。
「ったく、しゃーねぇーな！」

　クエストを受けに行ったところ、受付のルナさんにかなり驚かれた。目を輝かせながらたわわな果実を揺らし視線を奪われたのはここだけの話。めぐみんに蹴り入れられ

た。
　しっかしあぁは言ったものの…。
「デカすぎんだろ…」
　やっぱ無理かもしれない。
「何怖気づいてるんですかカズマ!?一匹狼と比べても格下！雑魚中の雑魚ですよ!?」
「いや、怖ぇだろあれ。俺ら、あれにのしかかられたらぺしゃんこ。分かるか？ぺしゃんこ」
　臓器ぐしゃー、南無ー。グロテスク。
　……やっぱおかしいだろ!?何食ったらカエルがあんなにでかくなるんだよ!?
「分かります！分かってます！だから剣でも魔法でも使って戦ってください！本当に喰われますよ!?」
「良し分かった逃げるぞめぐみん！ゆんゆん！」
「えっ？」「はいぃ？」
　めぐみんとゆんゆんを両脇に挟んで逃げる。
「ちょっ!?カズマ!?何故逃げるんです!?ってなんで２人抱えて走ってるのにカエルより速いのですか!?」
「か、カズマさん!?こ、これはかなり恥ずかしいです!?わ、私は戦えますから!?」

「やっぱこええぇぇ!!!あんなデケェもん相手できるか!?あいつ見た時から恐怖で帰りたくなったんだ!こんな時の為に取っておいた逃げ足スキルを大発揮するぜ!」
「「衝撃のカミングアウト!?」」
やっぱ冒険者は無理だぁ!?お家に帰してぇぇー!!
「カズマカズマ!ストップです!カエルの姿は見えなくなりました!なのでストップです」
はい。
「そしてカズマ、早く私を降ろして下さい」
はい。
「…カズマ。」
はい。
「…初めてで怖いのはもちろん分かります。でもですね、私が一匹狼の群れに囲まれた時のカズマ。普段は戦いたくないとか、すぐ逃げるとか言ってるのに、重症を負ってもなお、奮闘している姿、カッコよかったのですよ?もっと自信を持ってください」
「…めぐみん」
なんだか、めぐみんに励まされてばかりだ。武器を手にしたって、魔法があるからって、正直怖いものは怖い。

「カズマさん。大丈夫です！失敗しても私たちが居ますから」
「…ゆんゆん」
　失敗したって、カエルに踏み潰されない限りは生きてられる。過去に喰われたユンケルだって、今も元気に働けてる。
　まったく、この中では年長者の筈なんだけどなぁ。ここまで歳下に励まされてしまってはしょうが無い。
「余計な心配かけて悪かった。めぐみん、少し時間をくれ。ゆんゆん、今回は出番が少ないかもしれないが、何かあった時のサポートをお願いしたい」
「カズマさんは何をするんですか？」
「カエルを１箇所に集める。それをめぐみんが爆散させるって作戦だ」
「…！ついに私の出番が来たようですね！」
「…でもかなり厳しい役ですよカズマさん」
「大丈夫だ。こう見えて俺は大逃げのカズマさんと呼ばれた人間だからな」
「…ダサいですねやっぱり」
「あ、あはは…」
　不評だった。良いじゃねぇか大逃げ。
　…ぶっちゃけ殺ろうと思えば殺れない相手ではない。過去に１匹葬っている。しか

しだからといって、ここであいつら相手にスキルを多様するのは違う。スキルに頼りすぎると、使えなくなった時が怖い。

スキルなんて枠組みに囚われちゃ、自由がない。でも怖ぇな単騎突撃。こうなるんなら遺書くらい書いとけばよかった。

…いいや、いい加減男を見せろ佐藤カズマ。ここには俺の勇姿を待ってる女の子が2人いるんだ。ここで男を見せれば、きっとハーレムが待ってる…！いや、そんな無粋な事を言うのもな。俺だって、ようやく異世界で勇者になる機会を得たんだ。無駄にしちゃいけねぇ…ッ！

「逝くぞぉぉぉぉぉ!!!!」

「「それは天に召されるやつー！」」

拝啓、母さん、父さん。こんな思念が送られてきた頃には、私はもう死んでいることでしょう。恥の多い生涯を送ってきました。自分には、冒険者の生活というものが、見当つかないのです。短い時間を長く無駄にしていたと気付いたら、今までの生活が大した事ないと、にわかに興が覚めました。

「畜生ーッ！このカエル野郎がァァァァ!!」

今、私は1人の女の子が活躍出来るように努めていますが、これが最初で最期でしょう。

「ウラァァァァァァ!!!」
　私は雄叫びながら、カエルの腹を捌いているでしょう。夥しい量の生臭い赤色の液体、捌いてる筈なのに潰れたような音の断末魔、きっとここはカエル地獄かもしれません。仲間の悲鳴をトリガーに、地面に走る衝撃が強くなり、自然の怒りをフツフツと感じます。
「こっちだぜぇぇ!!カエル野郎共がぁァァ!!」
　でもこうして全速力の逃げが、叶うなら。
　あの時みたいに、小石に躓く事がなければ。

「よしっ！この距離なら……！行け！めぐみん！」
『その合図、待ってました！準備は万端です！エクスプロージョン！』
「えっ、その掛け声詠唱に含まれる――!?」
　詠唱に突っ込みを入れたところ、後ろから来る爆風と衝撃波に吹っ飛ばされた。

11話　パーティー

爆風が晴れた後、煤と土汚れで、俺の身体は汚れていた。めぐみんの放った爆裂魔法の余波に巻き込まれた俺は、某眉毛の繋がっている警察官の様にかすり傷程度で済んでいた。いや済んでしまったと言うべきか。

逃げ切った。今なら世界陸上選手権に出れるかもしれない。全力出し切った。しばらく横になっていたい。

「あっ！カズマさん！」

なんだか揺れが強くなっている。地震か？…いや違うなこれは。カエルだ。さっき散々味わったジャイアントトードから生まれる振動だ。倒したんじゃなかったのか？いや、聞いたことあるかもしれない。水辺から遠いところに住んでいるカエルは、自身の皮膚の水分が飛んでいかない様に、地中で過ごすとかどうとか。

もしかしてカエルさんは地中でお昼寝中で、爆裂魔法で叩き起された奴が迎えに来てるとか、そんなオチじゃ無いよな？もう疲れたんだが、もう立つ気も起きないのだが、これはもう絶体絶命ですかね？喰われるかプレスされるか。

やっぱ恥の多い人生送ってたわ。

『ライトニング！』

空を翔ける稲妻が、影が見え始めたジャイアントトードに直撃し、そのまま絶命した。

咄嗟に魔法が出るのだからなぁ。この世界の冒険者すっげぇわ。いかに危機感の無い生活を送ってきたのだと痛感させられる。ニートという社会的に見たら危機的状況だったと言うことは触れないでおこう。

「カズマさん！怪我は無いですか？」

めぐみんを背負ってゆんゆんがたゆんたゆんしながら来た。眼福、ってそう言ってはられんな。

「あぁ、悪い。怪我は無いけど、流石に疲れてな。助かったよ」

「い、いえこれくらい当然の事ですよ！もっと頼っても良いんですよ!?」

お、おう。そうか。この子は仲間と言うか、友達と言う存在に飢えている子だったな。

「どうでしたか、私の爆裂魔法。カズマのお陰で過去最高の出来でしたよ！」

「あぁ、すげぇよ爆裂魔法。前見た時も思ったが最後の一撃って感じですげぇや。巻き込まれて塵にならなくて良かった」

普通だったら死んでた気がする。なんか補正かかったと思うしかないくらい吹っ飛ばされたからな。

「ですよねですよね！やっぱりカズマには分かってもらえると思ってましたよ！どうで

す？私の爆裂魔法！これさえあればカズマの冒険にも役立てると思いますよ！」
「そうだな…。じゃあゆんゆん、これからよろしくな！」
「ひゃっ、ひゃい！ふ、ふふふっちゅかもによでしゅがっ！よ、よろひくおねぎゃいしましゅ！」
「おいちょっと待て何故私を選ばない」
　いや、確かに凄いんだけどなぁ。
「悪くは無いんだもちろん。ただ高火力過ぎる、と言うかオーバーキルなんだよなぁ。それでいて1回しか撃てないし、撃ったあと歩けないし。俺自体そんな余裕が正直無い。めぐみんを役立てるってか、活用と言うべきか、正直出来る自信がねぇんだ」
　やっぱ最後の一撃には違いないが、正直そうしてまで倒さないと行けない奴らを相手取るの。俺には難しいしな。
「そ、そんな！私とカズマの仲じゃ無いですか！」
「俺だってなぁ。あの火力、絶対役立てる瞬間があるとは分かるんだよ。ただ前衛と後衛を1人ずつ。人的余裕が無いと流石にキツい。何かあった時誰がめぐみんをサポートできるか」
　この街に来て、初めて一緒に街の外に出たのも、右も左も分からない俺にギルドと親方以外で教えてくれたのもめぐみんだ。ミツルギ、あいつも一応世話になったな。今度

会ったら金返さねぇと。
「カズマは、ただ私を追い出そうって訳じゃ無いのですね。なんだかそれを聞けて嬉しくなってしまいますね」
「そ、そうかよ」
…ゆんゆん程では無いが、めぐみんも俺と会ってから誰かと居る様子は無かったな。
…なんだか彼女たちの年齢を考えると俺って子守りなんじゃ――――おっと、めぐみんの表情が睨みに変わったぞ??俺は何も喋ってないのだけどな。感が良すぎる。
「…それじゃあ戻るか」
「そうですね。カズマ、おぶって下さい」
「はいはい」
俺自体、カエル１匹を倒しただけだ。ステータスを見て、レベルが上がったとか、強くなった気はしない。ステータスが高いともてはやされた。結局は謎の現象で冒険者。この街では壁工事を生業に、片手間にトレーニングと勉強だけしてた。
ぶっちゃけると、ギルドの冒険者たちには馬鹿にされるだけだった。最弱職の冒険者と、カエルすら倒せないから壁職人。別に全員って訳ではもちろんない。回数も多くない。多くは無関心だったからな。
でも、少し、ほんの少しだけ自信が付いたかもしれない。こうして一緒にクエストを

受けてくれる子もいる。1人では無理だ。絶対に。
「ふふっ！お友達が…ついに私にもお友達が！仲間が！めぐみんよりも先に…！」
「カズマカズマ、やっぱりゆんゆんを追い出して私を仲間にしてください。と言うか入れろ」
「ふふーん！何めぐみん？もしかして嫉妬してるのー？カズマさんも言ってたでしょー？「お前が必要だ」って！「お前が欲しい」って!!」
言ってない。これからよろしくとしか言ってない。
「はっ！ここまで妄想癖が強いともはや救いようが無いですね！カズマ？こんな煩悩の塊の人間、そこら辺に捨てて私を選びませんか？荷物持ちでもなんでも、カズマのためになんでもやりますよ？」
ん？いま何でもするって言ったよね？（言ってる）
おや、おやおやおや？めぐみんさんそんなこと言って良いのですかね？相手は思春期野郎のカズマさんですよ？本当に言って良かったのですか？
「なっ！私の方が役に立つわよ！めぐみんより魔法も多く使えるし、おっぱいも大きいし！」
おっと、それは甘美な響き…と言いたいのだが。後ろの圧が大変なことになっている。

あーあ、胸のことについて触れるのは絶対禁句だって。ゆんゆん調子乗り過ぎだったな。

修羅が生まれた。ここは修羅場だ。なんてこった。もう助からないゾ！

まあ、この後のことは触れないでおこう。

彼女達の名誉のために。因みにカズマさん大きいのも好きだけど美人美少女ならモーマンタイ。

――――

「チーン」

――合掌――

ゆんゆんはお星様になったのだった。

あの場での出来事は、めぐみんのフラストレーションが満タンになるには容易い事だった。

復活しためぐみんがゆんゆんのたゆんたゆんをもいで殺るとでも言った勢いで襲いかかったのだ。泣いて詫びるゆんゆんの悲鳴に耳を傾けずに、気の済むまでめぐみんはゆんゆんに怒りをぶつけていた。ぶっちゃけ怖くて止められない。でもその大きな果実がめちゃくちゃに揺れるその場面、いかん。子供には見せられない。これは俺の秘蔵エピソードとして夜に語り継ぐ事にしよう。

――――ふう。

閑話休題

これ以上収拾がつかないとなると周りからの視線や評判が辛くなるため、めぐみんを落ち着かせた。多分食に走るだろう。俺の財布を犠牲にして。

「全く！ゆんゆんったらすぐに調子に乗るのですから！」

「うぅ…めぐみんごめんね？」

喧嘩するほどなんとやら。ここまで本気で喧嘩されると、見ている側も清々しい気分だ。

こんなしっかりと友達と大喧嘩したのはいつだったかなぁ。

「ほら、めぐみんも機嫌治せよ。今回はカエルじゃなくてチキンにしたから、美味いぞ～」

「頂きます」

「あぁー!?欲張って食うなよお前！俺の分も考えてくれ！」

「えっ？私は？」

カエルよりも高価な鶏肉はすぐさまめぐみんの口に放り込まれた。

装備整えたらすぐご破算だ。

お会計、2万以内で済んでくれねぇかなぁ。こんなに味わって食わないならカエルで

も良かったな。倍近く値が張ったのに…トホホ。
「ふっふっー·こう言うのは早い者勝ちなのです！」
「行儀悪いぞ」
「うぐ…」
箸で唐揚げを取りながら、炭酸を流し込む。
今日は子供の前だから酒は無し。でも疲れた身体には炭酸が欲しくなるんだよなぁ。
炭酸飲料と言えば、何も味のついてない炭酸水と、シュワシュワするお酒（クリムゾンビアと言うらしい）くらいだ。ジュースは見たことないなぁ。
「あっ、この唐揚げ美味しい」
２人とも食べ盛りの女の子だ。…やっぱカエル肉にしときゃあ良かった。皿の上の唐揚げがどんどん消えてはどんどん盛られてくる。
あぁ、さらばマネー。

12話　旅立ち

「親方、世話になりました！」
「そうか、冒険者になる決心がついたか。医者に運ばれた時に事情は聞いたさ。やっぱこんな所いるよりお前さんは冒険者として色々なところ行って見聞を深めた方が良いさ。なんかあったらまた来な。俺たちはお前のこと、待ってるからな」
「カズマこの野郎！両手に花とは羨ましいぞー！」
「カズマー！ちゃんとその2人守りなよ！」
「今度会ったら飲もうぜ！」
「なんなら今から飲もうぜ！」
「あんたら酒の事しか考えてねぇのか!?いや、変に惜しまれるよりはその方がありがたいけど！また仕事しに来ると思うんで！そん時もよろしくお願いします！」
　陽気な兄ちゃん達は最初の頃会った時となんにも変わらなかった。最弱職の冒険者である俺をバカにすることも無く、共に働く仲間として接してくれた。ギルドには飯を食べに行くだけで、冒険なんて一切しなかった。何も出来ない冒険者として一部に馬鹿にされていたが、それでもこの人たちのおかげで気が楽だった。

「ふふっ！カズマ、皆さんに愛されてるんですね」
「早速「次戻ってくるのは3日後か？」なんて後ろから聞こえてくるけどな！」
「でも、カズマの事ですから、あれは冗談だって分かっているのでしょう」
「…まあな」
土方の兄ちゃん達、陽気過ぎた人達だ。

――――

「新入り文字通り職業が冒険者なんだって！最弱職じゃねぇか！この際どうだ！俺らと土方やっちゃわねぇか？見たところかなり鍛えてるみたいだからな！あっはっは！」
「おら飲め飲め！仕事終わりのグリムゾンビア！キンッキンに冷えてて最高だぜ！」
「おいカズマ！あの赤目の嬢ちゃんは彼女か!?いくらモテる自信無いからって子供は…あ？２歳差？ウッソだろお前冗談は顔だけにしろよ！……あ？お互い様？うっせぇ！」

――――

短い間だったが、色々あった気がする。
ちょっと寂しさがあるのは否定できない。
ここで1番最初の仲間と言えば彼らだから。彼らが居たから、元気にやってこれたと言うのは否定できない。俺1人、地道にカエルを狩るだけだったら、こんなにも晴れやかな気分にはならなかったし、どうせ野垂れ死にしていただろう。

命の恩人でもある彼らが、今も楽しく生きられるなら。
それなら、きっとそれは、素晴らしい世界で間違いないだろう。
何かの手違いか知らないが、俺はこの世界にやってきた。トラウマのない世界。まるでゲームの様な世界だったが、右も左もわからない、チュートリアルに入ることすら条件が必要なクソッタレな世界だった。
「やっぱり寂しいですか？」
ゆんゆんが俺の顔を覗いてくる。めぐみんもだが、彼女たちは相手の心情を機敏に察知する。
２人の心配そうな顔を見ると、寂しさが表情にも出ていたのかと、少し恥ずかしい気分になる。
「そりゃあ、な。ここに来てから、同郷の奴、ギルドの人、そして何よりも親方達にすっごい世話になったからな」
なにも今生の別れではない。なんだったら明日にでも会いに行けるくらいの距離だ。ここまでしんみりする必要は無い。
「でもまあ、今はお前たちが仲間だからな」
「カズマ…。安心してください。私は貴方の仲間ですから！」
「ねぇめぐみん？そこは私たちじゃ無いの？」

「ゆんゆん居たのですか？」
「もおぉぉぉぉ!!!」
めぐみんがゆんゆんをからかい、そこからちょっとした喧嘩、と言うか勝負というか。ちょっとした言い争いに発展する光景が、なんだかいつもの光景になりつつある。
今までは壁を相手に汗水垂らして、ギルドで美味い飯を食べ、たまには酒を片手に大盛り上がり。それでも剣と魔法を武器に戦える事を夢見て馬小屋で天井を見上げる。
学があればしっかりとした職業にも付けていただろう。本職じゃない、日当と言う形で給与を貰う日雇い、正社員よりも安い賃金だったが、コツコツ働けば溜まっていくくらいは貰えたし、何より有り余った体力を使うのにもってこいだった。
それでも、自分は冒険者なんだと、モンスターを倒すんだと想像しても、あの時のカエルが頭を過ぎる。自分はカエル１匹倒すのがやっとだと情けないながらも分かってしまった。
素人ながら、俺はミツルギの様に魔王を倒す勇者のような素質はない、かなり能力はあるのにそれを行かせない宝の持ち腐れの様な人間だと思っていた。
それでもめぐみんと出会い、彼女の生き様を見てそれに憧れを持った。彼女にこの世界の事を少しばかりだが教わり、自分にも素質があるのだと知れた。
彼女となら、きっと冒険者としても上手くいくだろうと。根拠の無い自信も持ってい

た。

世話になった彼女が、今にも儚く消えそうな表情をした時は、信じられないくらい必死になった。彼女が消えるかもしれない、それが非常に怖かった。そしてその手をすぐに取れなかった自分に悔い、怒りが過ぎった。

彼女を最後まで守れなかった時は、非常に後悔した。ゆんゆんが来なかったら、今頃俺もめぐみんもあの世だったのだから。

こうして振り返ると、俺の思い出の半分近くはめぐみんが占めてるんだな。なんだよ、めぐみんの事好きすぎかよ。

でもそう考えると、あながち間違ってないのだと実感する。それが友情なのか、愛情なのかは分からないけど。

「めぐみん」

「？どうしましたか」

「ありがとな」

こう改まって言うのはなんだか恥ずかしいが、なんだか言わなければならない気がした。

「…お礼を言うのは、私の方ですよ。カズマこそありがとうございます」

「おいおい、礼を言われるような事は…色々してるな」
まあ飯をたらふく食わせた礼は既に貰っているけどな。
「ええ、色々です。ご飯を奢ってもらえたり、一緒に爆裂魔法に付き合ってくれたり、倒れている私を助けてくれたり……なにより、私を見つけてくれた事に、お礼が言いたいのです」
ゆんゆん程ひとりぼっちでは無いですけど、と頬を掻きながら冗談交じりの照れ顔で彼女は話す。うっわはっず。こんなに真っ直ぐに思いを伝えられるなんて無かったせいで、多分俺の顔は熱くなっているのが容易に想像付く。
「ゆんゆんもな。お前が居なかったら俺たちは死んでたから」
「い、いえ！ら、ライバルの危機を見過ごすことは出来ませんから！私だってカズマさんには感謝の気持ちがいっぱいなんですよ！こんな私を仲間にしてくれたんですから！」
なんというか、年相応と言うか、ゆんゆんらしいなとも感じる。まだまだこう言う所は子供なんだなぁと。そして齢１６の俺よりも年下の子が、友達作りで苦難を抱えているのを見ると放っておけない。めぐみん以上に庇護欲を感じる。これが母性……？

俺には勿体ない仲間だ。最弱の冒険者。正直まだ魔物を相手に戦うのは怖い。使える魔法や技術を手にしたところで、それで倒せたという事が証明になっても、やはり怖

い。

別にミツルギたちと違って魔王を倒す使命も無ければ、俺は好き勝手に生きたってバチは当たらないはずだ。

でも、そうじゃない。

彼女たちが、俺を冒険者として求めてきた。それに答えずして何が男だと。俺は佐藤和真。日本で生まれ、ニートの穀潰し。それでも男であることを止めたことは1度もない。

良いじゃねぇか成り上がり。魔王を倒すと言う気はねぇが、放浪人が大活躍、燃える展開だ。

この世界に来た時以上に、自分の心は燃えているかもしれない。この熱がいつまで持つかは分からないが、やると決めたらやってやる。

早速カエルをシバキに『グゥゥーー』……

「取り敢えず飯にするか」

「お腹がすきました」

「そ、そうですね……」

めぐみんとゆんゆんの腹が同時になり、少し出鼻を挫くような展開になった。

この後のカエル討伐で、俺がカエルに丸呑みにされたのはここだけの話。

13話　盗賊少女とクルセイダー

「冒険に役立つスキルとは何か」

カエルの生臭く生暖かい粘液に包まれた、いや包まれてしまった俺は、俺から少し距離を置いている紅魔族2人に対して問いかけていた。

カエル5匹倒すクエスト、カエルを倒してやると意気込んでいた最中。1発放ったライトニングが命中し、簡単にカエルを仕留められて舞い上がっていたら、長い舌を伸ばした別のカエルに丸呑みにされるという悲しい目に遭ってしまった。幸いゆんゆんの『ブレード・オブ・ウインド』により救出はされたが。

使える手段はとにかく欲しい。それがどんなにゲスい手段だろうが関係ない。相手を縛って身動き取れない状態で斬りかかれるならそうしたいし。相手の武器を奪えるなら奪ってタコ殴りにするくらいはやりたい。口には出さないが。

「やはり爆裂魔法で「無理」そんな!?」

「やっぱり中級以上の魔法があると便利ですよ!」

「あると便利だけど、それを覚えるほどのスキルポイントは…あるが、全部まとめて覚えた方が都合は良いもんな…」

「1個ずつ覚えるよりは、纏めて取った方が楽ですからね。技1つ覚えてるだけでも十分なのを考えると、そう急いで覚える必要は無いと思います。私たちなら魔法関係はいつでも教えられます。カズマの場合は他のスキルを覚えて活用する方が合ってると思います。それよりもそのヌメヌメ落としに行きませんか？」

「そうだな。流石にずっとヌメヌメはキツい」

少しはヌメリを落としたいが…。こうすれば良いか。

『クリエイトウォーター』

水を発生させる魔法、これを全身に…うっわ！冷てぇ！キンキンに冷えてやがる…！

『ティンダー』『ウィンドブレス』

火を発生させ、そこから少し離した所で風を作る。即席ではあるがドライヤーみたいなもので水っけを軽く飛ばす。初級魔法という事もあり補助的な力しか無いが、身体を乾かすのに威力は要らないからな。

「これで良し」

「おぉー！器用に使いこなしますね」

「こうして見ると初級魔法も便利です！」

それでもお風呂が恋しいのだからゆっくりはしていられない。ヌメリは取れても臭いがまだ残っているから石鹸を使いたい…。

「街に戻って風呂と飯にでも行こう。今日は身体を休めようぜ」

カエル狩りの翌日だが、今日はスキルを教えてくれる人を探すことから始める。
「なんか悪いな。手伝わせちまって」
「カズマは仲間で、私たちのリーダーなのですから。これくらいは良いのですよ」
「それにカズマさんがスキルを覚えれば、できるクエストの範囲も広がりますから！」
この子達の思いにお兄ちゃん泣きそう。
色々拗らせてる所があるけど、基本この子達は素直で良い子だからなぁ。
「そうだな。敵の位置が分かったり、相手を生け捕りにしたり、相手の武器を奪えたり。あとは相手の魔力とか生命力を奪ったりとか」
「便利なスキルは仲間のレベリングでも役立ちますからね。でも最後のはまず無理でしょう。そこまで来るとリッチーのスキルですし、何よりそんな存在危険過ぎます！」
魔法使いにとって、魔力を奪う存在は死活問題だよなぁ。それを仲間に配れるなら話は変わるが。
「なら前者を探すしか無いか…」
相手の武器を奪うって所にフォーカスすると盗みを働く職業。たしか盗賊って職業があったはずだ。生け捕りにするとなるとハンターか？でもそんな職業あったかな…

？

「お困りの様だね」

「…ん？あなたは…？」

やけに肌の露出が多い、銀色の短髪と頬の傷が目立つ中性的な顔立ちの子がそこにはいた。その後ろには長い金髪をポニーテールでまとめている、風貌から私は騎士だと言っている様な女性が立っていた。上半身を鎧で固めているが、それでも分かる母性の象徴…。人間ってすげぇなぁ。

「あたしはクリス。職業は盗賊だよ。それでこっちの無愛想な子はダクネス。この子は上位職のクルセイダーをやってるよ」

「おぉ、盗賊…!?あぁ、俺は冒険者のカズマ、で2人がアークウィザードのめぐみんとゆんゆん」

盗賊は一般職ではあるものの、役立てる場面がダンジョンと言った限定された環境になり、それを生業としている人物は多くない。盗みって名前が敬遠されているのもあるだろうが。

でもまさか向こうから来るとは思わなかった。

「随分と悩んでいたみたいだけど、どうしたの？」

「あぁ、実は…」

かくかくしかじか。…最近観ないなぁ…。

「それならあたしの出番だね！敵感知にバインド、スティールってスキルでどれも盗賊のスキルだよ！」

「本当ですか！あの、虫のいい話だとは思うのですが…」

「あー、畏まらなくて大丈夫だから！それにスキルは教えるから安心して！」

うっわ、女神か？この人女神か？心が広いなぁ…。錯覚か分からないけどなんか神々しく見えるし可愛いし。

「ここじゃああれだしさ、裏手の広場に移動しようよ」

「ありがとうございます！お願いします！」

「良かったですねカズマ！」

こうして俺は盗賊の美少女、クリスの手を借り新たなスキルの習得を目指すのだった。

冒険者ギルドの裏手にある広場

人気のないこの広場にクリスたちも含めた俺たち5人は立っていた。

「まずは『敵感知』と『潜伏』を同時に習得しよう。口で教えるよりも実際にやってみせるのが一番かな？ダクネスー？ちょっと向こう向いててー？」

「…ああ、分かった」

ここまで空気になっていたダクネスさんがようやく言葉を発した。凛々しさの混ざる声だったがすごい暇そうにしている。

どうでも良い事を考えているとクリスはダクネスさんの向いた方向とは反対の方角にあった樽の中に隠れ、何を考えているのか石をダクネスさんに向かって投げ出し、すぐさま隠れた。

なあ、これ、まさか潜伏スキルとでも言うのか…？ダクネスさんは真顔の顔で、それでいて怒りの雰囲気が滲み出ている状態で足早にクリスの隠れている樽に向かい歩き出した。

「敵感知…！ダクネスの怒ってる気配をピリピリ感じる！ダクネス!?こ、これはスキルを覚えるため仕方なくやってる事ああああ!!!やめてええええええ!!!」

樽を倒され、そのまま転がされた。む、惨い…。いや、自業自得なのか…？自分のスキルカードを見ると、新たなスキルが追加されていた。…本当に見ただけでスキルが覚えられるんだな。こっちの世界に来た時のプレゼントなのか、クリスがやって見せたように見ただけで覚えられる程度のスキルなのかは定かでは無いが、まあ便利なのには変わらない。

スキルをもっと理解できるようになれば役立ちそうだ。クリスの悲鳴から目を逸ら

す様に自分の世界に入る。
因みにめぐみんとゆんゆんは若干引いてた。
まあ、今回は目立つことをしたと言うのもあり潜伏スキルは役立ってなかったが、こう言った茶番なし（ダクネスさんはマジおこだった）の本番で使えば間違いなく役立つスキルなはずだ。
「う、うぅ。目が回る～」
「す、すまない。やり過ぎてしまった」
「いえ、気にしないで下さい。寧ろこちらが頼んでいる側なので、逆に暇にさせてしまって申し訳ないです」
「あ、謝らないでくれ。私は大丈夫だ。寧ろ放置プレイはご褒美…！」
あ、これこの人も若干ヤバい人かも知れませんね。まともな人ってどこにいるんや…。
「そ、そうですか…」
「んん！それと、丁寧な言葉遣いは私には不要だ。少し距離を感じるし、あまり慣れていないみたいだからな。私もクリスと同じように気さくに話しかけてもらえると嬉しい」
「…それならお言葉に甘えて。あまり目上の人と話す機会が少なかったからな。知識としては持ってるがあまり使い慣れていないんだ」

どこかの貴族の人かなとも思い遠慮していたが、その必要は無さそうだ。
「…ふぅ。落ち着いた。それじゃあ続いて本日の目玉の窃盗（スティール）スキルだよ！」
復活したクリスによるスキル習得の続きが始まる。
「これは単純に相手の持っているアイテムを１つ奪うことが出来るスキルでね、運が良い人ほどより高価な物を奪う事ができるんだ！例えば…『スティール』」
クリスがスキルを唱えると差し出された右手が輝き、輝きが収まると右手には袋が…ってあれ俺の財布!?俺の全財産の３０万エリス!?
「おっ、大当たり！とまあ、この様にゲット出来るわけ！それじゃあ…勝負してみない？」
「勝負？」
「そう勝負。あたしに窃盗スキルを使ってお宝を手に入れようってね。一番高価なのは…カズマって意外とお金持ってるんだね！でもあたしのタガーが何とか価値があるかな。特殊な素材を使っているから３０万エリスは最低値かな？因みにハズレはさっき集めてたこの小石のどれか」
「そ、それは卑怯だぞ!?」
「奪い返せば良いのさ！と言いたいところだけど、お金は後で返すよ。一生懸命働いた

お金でしょ？それとは別にチャレンジしてみよう！もちろんゲットしたものは君にプレゼント！どう、君には得しかないよ！」

「…後で文句を言っても遅いからな！」

俺はこの方運だけには恵まれた人間。こうした運試しにはとことん強い男だ。自分のスキルカードから『潜伏』『敵感知』『窃盗』スキルをそれぞれポイントを1ずつ振り分け習得する。

「それじゃあ…」

右手をクリスに向け拳を強く握る。

「スティール！」

強い輝きが辺りに広がった。これは手応えあり！

光が収束されると手の中には何かを掴んだ手応えがあった。取り敢えずは成功したみたいだ。

しかし、金属系にしては柔らかいし、銭の入っている財布にしては軽い。

握り締めた手を広げるとそこには白い布があった。そして何かに気付いたクリスが顔を真っ赤にしていた。

…これは当たりだろうな。さっきまで穿いていた下着。確実に当たりだろう。思春期真っ盛りな俺なら振り回してた。しかし同時に罪悪感を感じていた。ゲットした物

をプレゼント、だからと言って顔見知りになった子の下着をプレゼントされたって、いくらかわいい女の子の下着だからって、後が気まずい。
なら俺の答えは決まっている。フリーズしてからこの間５秒。
「…お返しします」
「…お願いしましゅ」
恐らくこんな美少女の下着、言ってしまえばパンツ。さっきまで女の子が穿いてたパンツ。これほど希少価値のあるものは無いだろう。
だがどうだ。俺はやってのけてしまったが、これは猥褻行為になるのでは無いのか？
「か、カズマが変態になってしまいました…」
「こ、こんな公衆の前で…な、なんと羨ましい…」
俺は変態と言うレッテルを貼られることになる。
「ゆんゆん」
「あ、はい！か、カズマさんはわざとじゃ無いと分かってますから、だから気にしないで
「この剣を渡すから介錯を頼む。」えぇ!?は、早まらないでください!?」
日本に生まれた身として、自分の粗相は自分で落とし前をつけねばならぬ。潔く腹を切ろう。これがクリスに対する究極の罪滅ぼしだ。
「クリス、最後に申し訳ないが小刀を貸してくれ」

「お、落ち着いて落ち着いて!?あ、あたしは大丈夫だから!?本当に落ち着いてよ!?そんなか、簡単に死を選んじゃダメだよ!?」

「自分の不徳が招いた事だ。潔く腹を切る」

覚悟は決めた。あとはかっ捌くだけ。粗相をし先に旅立つ息子を両親は許してくれるのだろうか。地獄で我が両親を見上げることしか出来ないだろう。

「だ、誰かカズマを止めて～!?」

ギルドの裏ではパンツを奪われたものとは違う悲鳴が響いたのであった。

１４話　キャベツ　襲来

盗賊スキルを習得しちょっとした事件があった後すぐ、街にはギルドの切羽詰まった声が響いていた。取り敢えず俺は正気に戻った。

『緊急クエスト！緊急クエスト！冒険者各位は正門前に集まってください！　繰り返し――――』

只事では無い雰囲気に唾を飲み込む。まさか凶悪なモンスターが街に攻めてきたのだろうか。それって駆け出しの街でどうにか出来るのか？いや、やるしか無いのだろうな。

…しかし、みんなすごい落ち着いている。

「今年もこの季節ですか」

「そうだ！どっちが多く収穫できるか勝負しましょう！」

この季節？収穫？

「おいおい、これって凶悪なモンスターが襲ってきたとかじゃないのか!?」

「この時期なら間違いなくキャベツでしょう。ちょうど収穫の時期ですから」

「そうだな。今年は天候も良かったし、恐らく活きの良いものばかりだろうな」

え？キャベツ？あのシャキシャキした？
「ちょ、ちょっと待ってくれ。これは農家の手伝いでもしに行くのか？それなら俺でもやれそうだけど…」
でもそれならこんな緊急で集める必要は無くないか？
「何を寝惚けた事を言っているのですかカズマ？そんな危険な事冒険者でも無いのに出来ないですよ？」
お前は真面目な顔をして何を言っているんだ。
「もしかしてキャベツってモンスターの事か？俺の知っているキャベツは緑の丸っこい奴で、秋から春にかけて生育し、寒い環境にもある程度耐えられる、シャキシャキしておいしい奴なんだが…そんな危険だとは思わないが」
そもそも野菜が自我を持つことが考えられないのだが。
「それで合ってますよ。キャベツは野菜です。と言うよりカズマそこそこ詳しいじゃないですか」
「なら何で農家の人には危険なんだ…？」
何だか話が噛み合わない。
「…カズマさんって他所の国の方でしたよね。キャベツって空を飛んで、収穫時期になると食べられてたまるもんですかと反撃し、群れで移動して、人目につかない所でひっ

そりと息を引き取るんですよ」
　えっ、何それ。怖。アグレッシブ過ぎない？
「しかも攻撃力がかなり高いですから、一般の人どころか冒険者相手でも重症を負うことがあるのです。だからこの収穫のタイミングは春の風物詩でもあり、一般的な事なのです」
　なんだその風物詩。恐ろしい…。
「本日はお集まりいただきありがとうございます！今年のキャベツは栄養満点で品質がとても良い為、１玉１万エリスで買取します！」
　キャベツ１玉１万エリス…。確かにそれならやる気を出すだろう。…折角のスキルを無駄にするのも何かな。それなら…
「それじゃあやるか」
　キャベツが空を飛んで人々から逃げる為襲うとか、正直ファンタジー過ぎると言うか発想が恐ろしいのだが。
「それでこそカズマです！良い指示、期待してますよ！」
「どっちが多く収穫できるか勝負よ！」
「それなら私も助太刀する。民を守る為の盾になろう」
「この流れだとあたしも出ようかな？盗賊の意地、見せてあげるよ！」

皆のやる気は十分。そりゃあ取れば取るほど金稼ぎだもんな。俺はイマイチ空を飛ぶキャベツが想像付かない。
「なあ、キャベツに爆裂魔法ぶち込めばどうなると思う？」
「爆散するでしょうね。間違いなく」
「どんな感じで襲撃？するかは分からないが、大量の群れで来てたら、爆裂魔法で分散出来ねぇか？」
「出来ます。私を舐めてもらっては困りますよカズマ！我が爆裂魔法のコントロールは紅魔族随一なのです!!」
…戦法は出たとこ勝負になりそうだ。ジャイアントトードくらいしかマトモに対峙出来てねぇからな。これくらい応用効かせるのが良いのか。
「キャベツって、羽で飛んでるのか？」
「いえ、外葉で飛んでます」
「つまり外葉を奪えれば足止めできるか」
「そういうことになるね」
なるほど。
「ダクネス、キャベツの猛攻に耐えられるか？」
「任せてくれ。寧ろウェルカムだ!!」

「お、おう」
　じゃあ決まりかな。
「報酬は等分になるが、クリスとダクネスはそれで大丈夫か？」
「それで大丈夫。みんなでいっぱい稼ごう！」
「私は構わない。それよりもキャベツからの猛攻…楽しみで仕方がない！」
　大丈夫そうだ。１人病院に行った方が良さそうだが、まあ気にしないでおこう。
「じゃあ即席の作戦だが――」
　俺たちチームのカエル以外との戦いが始まる。
――
　多くの冒険者が壁の外に集まる。みんな目が金になってる。キャベツがそんな高い換金されるなんて正直想像がつかないが、そう言えばキャベツって栄養以上に経験値が豊富に詰まってて、貴族はこれを食べてレベルを上げ、強くなっていると聞いている。かなり高級な食材らしい。想像付かない。だが、気付けば遠くの空に緑の大群が見えてきた事により、あぁ、キャベツって空を駆けるのかと現実を知る。
「皆さんキャベツです！キャベツの大群がやって来ました！」
「よし、めぐみん構えろ！」
「はい！『黒より黒く、闇より暗き漆――』」

「それじゃあさっき説明した通り、めぐみんの爆裂魔法で群れを分散、ゆんゆんはめぐみんを回収した後魔法でキャベツを、ダクネスはゆんゆん達のサポートに回ってくれ。俺とクリスは持てるスキルを使ってキャベツを回収しにいく」

『はい！』

『カズマ、こんな絶好な場面を何度も用意してありがとうございます！持てる力を全て使い次に繋げます！エクスプロージョン!!』

轟、とこれまでよりも強い爆音に爆風が自身の身体に放たれる。重い、身体にのしかかってくる重さ。壁を崩しにかかる。心做しか親方達の悲鳴が聞こえてくる。こんな爆裂魔法、キャベツの群れでさえひとたまりもないだろう。結果群れは二分された。

「よっしお前ら行くぞ！『ライトニング！』」

最初よりはコントロールの上がった雷魔法は、空気を裂いて通り道のキャベツを感電させ地に落とした。雷に打たれた鳥のように音もなく意識を飛ばした。魔法って恐ろしい…これは使い方誤ったらヤバい威力だ…。

「カズマ凄いよ！あたしも負けてられないね！『スティール！』」

一玉ずつ、それでいて確実に。外葉を失ったキャベツは慌てる素振りも出来ないくらい無惨に落ちていく。

これがラグナロク…。キャベツが隕石のように降ってくる。普通に考えたらぶつ

かったら痛てぇよなぁ。
「カズマ！キャベツが私たちに向かって来てるぞ！感じる……！キャベツの怒り……！さぁ！早く私にその怒りをぶつけるんだ！はぁ…はぁ……！」
「何発情してるんだあんたは!?頼むからゆんゆんとめぐみんを守ってくれよ!?」
　こいつやべぇ、剣を持つのは様になってるのに、顔がデロンデロンになってる。お、恐ろしい。でもさっきから剣が当たらず鎧で攻撃を受けてる…。とんでもねぇ、ドＭとんでもねぇ…。キャベツの猛攻を楽しんでやがる…！
『ブレード・オブ・ウィンド！』
　ダクネスが撃ち漏らしたキャベツはゆんゆん達目掛けて突撃を来ますが、瞬時に唱えられた風魔法を前に真っ二つ。あらやだ、中身まですっごいぎっしりしてるし色合いがいい。新鮮な証拠だ。美味しいだろうなあれ。
「こりゃあ皆に負けてられねぇ！俺も『ライトニング！』」
　魔法と言うのは便利なものだと身に染みて感じた。だが身体はまだ慣れていないのもあり、全力で連発すると体力が持ってかれる感覚がある。上手いこと調整が出来ねぇ。
「カズマ、魔法に力を注ぎ過ぎです。毎回威力を込めすぎてはそれは上級魔法クラスの消費量です。魔力の消耗が大き過ぎてすぐバテてしまいます」

「って言ってもな…上手いこと制御出来ねぇわ…ってキャベツ！てぇぇやぁ！」
ただ、ザクッとまな板の上で音を立てる様に、キャベツは咄嗟に取り出した剣により半玉キャベツに…やべぇ、気持ちいい。
「おっし！いくらでも来いやキャベツ！全部まとめて千切りにしてやる！」
なんだろう、剣を持ってるはずなのに、包丁を持っているかのように軽い。今ならぶっ切りでも千切りでもなんでも出来そうだ。
「うおおお!!!!」
その日、アクセルの街から逃げ出せたキャベツは過去一で少なかったらしい。

１５話　収穫クエストを終え

「うめぇ、なんでキャベツってこんなうめぇんだろうな」
キャベツの乱獲大会を終えた夜、冒険者ギルドの食卓にはキャベツ料理が振る舞われた。
ただキャベツを塩で炒めただけの、野菜炒め。これが何故か今まで食べたものより美味い。
文字通り新鮮だったからなぁ。植物も生きていると、感情があるのだと。丹精込めて作られたのだと。だから植物に、調理者にそして生産者に感謝して食べていたが、よりその有難みを身に染みて感じた。
そして酒（クリムゾンビア）によく合う。
こりゃあ高級食材だ。俺も金持ち貴族になりてぇな…。
「今回は結構稼ぎに自信あるね！」
「そうですね。私たちのチームが１番収穫が多かったのですから！」
俺たち５人の収穫量は、次の収穫量を誇るチームよりも倍近くも多かったのだ。
「カズマは途中バーサーカーになってたからな。襲い掛かるキャベツを軒並み真っ二つ

にする腕は見事なものだった」
「自分でも驚くほどだったよ。料理でもしていた気分だった」
「もしかして料理スキルが役立ったのでは無いでしょうか。確かカズマは習得していたハズです」
　あれってそんな能力があったのか…？
「料理スキルがキャベツとかの野菜に特攻を持つなら、他の食材に成りうるカエルなどにも効くのでしょうか？」
「喰われたけどな俺」
　モンスターだからダメなのか？キャベツは一応自我は合ったが野菜の枠組みだったからな。いや、それなら肉の塊と化したカエルだって。それはモンスターではなく肉の塊として調理食材としてカウントされるのか？よく分からねぇな。
　まあ、それでもキャベツ効果は凄まじいのが本当みたいで、こうしてキャベツを食べていたら倒したのも含めて２つレベルが上がっていた。レベルは７。正直カエルを倒してもそこまで経験値が溜まっていないことを考えると、俺は経験値が溜まり辛いのかもしれない。冒険者は経験値が上がりやすいって話なのに、めぐみんやゆんゆん並か、それ以上に経験値が貯まらない。それを考えてるとあの一匹狼って相当だったんだな。
「何はともあれ今回のクエストは大成功だろう。経験値的にも。まだ報酬は発表されて

ないけど期待できそうだ。金の使い道考えておこうぜ」
「そうですね…纏まったお金が入れば実家の両親と妹にちゃんとしたご飯食べて貰えます。欲を言えば杖を新調したいですが」
「私も新しい装備が欲しいな。より強い防具に身を纏えば、もっと強いモンスターからの猛攻に…はぁ…はぁ！」
「カズマは何か使いたいものとかあるの？」
「俺か？まずは装備や服装を整えるところかな。剣はギルドの借り物だし、服装だってここに来てからはこれを着回してばかりだしな」
　資金が潤沢になれば冒険者の仕事とは別の仕事を展開したいが、何分経験も人脈も無いから夢物語過ぎる。
「確かにカズマはその服を使い回してますよね」
「カズマさんのイメージではありますけど、それ１着しか持っていない事を考えると…」
「んん！得物についても自分のを持っておく方が良いと思うぞ。ギルドから借りたままだとその分費用がかかるからな」
「まあ整備したところでダクネスの攻撃は当たらないんだけどね」
「ひゃう!?」
　取り敢えず装備を整えるところから始めないとな。いくら入るかは知らないけど、取

り合えず３０万エリス近くは現状持ってるから、なんとかなるよな……なるよね？

「ところでダクネスは剣のスキルは取ってるのか？あんまり攻撃が当たってないような気がしてな」

「私は各種耐性スキルや、周囲のモンスターを集める『デコイ』と言ったスキルは取っているが、両手剣のスキルとかは取ってないんだ」

「……それ、不便じゃねぇか？覚えた方が後々便利だと思うが」

耐性スキルか…。それに加えて囮スキル。なんと言うか、そういうプレイなのかと想像付くようなスキル。物理的に守りが硬いと思ったら、そらそんだけ耐性あるならそらそうだわ。

「元々不器用な性分でな。それでも誰かの盾になれるのであれば、私の騎士としての本望だ」

「……カッコイイ事言ってるけど、さっきの惨状を見るとなぁ」

――それは　騎士と呼ぶには　あまりにも欲望に忠実過ぎた――

それでも、今言った事に嘘は感じられなかった。騎士として民を守ることを誇りに思っている。俺はそう言う風に感じ取れた。欲望が見え隠れしている事については目を逸らして。

しかし誰かの盾か…。

「なあダクネス」
「なんだ？」
「お願いがあるんだ」
「お願い？…ハッ！ま、まさか私の身体を求めているのか!?初対面でいやらしい視線を感じて以来は何か汚物を見る様な視線しか感じなかったのに！や、やはりお前は私の見込んだ人間だ！き、騎士の誇りにかけてぇ！わ、わらしわ！じぇったいにぃ！きゅ、きゅっちにゃい!!」
「カズマ」
こ、怖ぇ…。色んな意味で。このド変態騎士が怖い。後ろのめぐみんのゴミを見るような視線が怖い。ゆんゆんの逸らした目が痛い。周囲の刺すような視線が痛い怖い。た、助けて。
苦笑いを浮かべるクリスに助けを求める視線を送る。
「ダクネス。カズマ怖がってるよ？」
「ふぇ？あ、この養豚場の豚を見る様な冷たい視線！ンッンッ！浴びるだけでゾクゾクするっ！」
「く、クリス様た、助けて！こいつ怖い！」
何か危機を感じ取った俺はすぐさまクリスの後ろに隠れる。こいつ怖い！頼みたい

ことがあっただけなのにどうしたらこんな妄想垂れ流せるんだ！女性怖い！こいつ怖い！

「ダクネス、落ち着いて。カズマが本気で怖がってるから。それ以上はやめて。こっちも恥ずかしいから」

「うう……はぁ、正直…はぁ、すまなかった」

息がまだ興奮してる。カエル以上に怖かった。女の人怖い…。

「もー、人様に迷惑かけるなら流石に怒るよ？」

「も、申し訳ない…」

クリスの強い眼差しが効いたのか流石のダクネスも萎縮していた。女の子って強いな…。

「もう大丈夫だからね？しかし、何でも出来そうなカズマもまだ幼さが残ってるんだね」

幼さって、あれは純粋に怖かった。…ってなんかクリスに頭を撫でられてる。…いつぶりだろうな、こんな誰かに甘やかされたのなんて。よしよしなんて微笑まれて撫でられるなんて。

なんだろう、まるで…

「…女神様」

何もかも包まれている様な気分。それでいて全てを赦してくれそうな、そう言った雰

囲気だ。母に似た、それでも母とは違う。本能でそんな気がした。その言葉に驚いたのかクリスは過剰に反応した。
「女神なんて、ははは。あたしはそんな柄じゃないよ」
「いや、俺はクリスが女神と言っても信じられる」
　クリスたんマジ女神。略してＣＭＭ。能力成熟度モデルの略では無い。
「大分話が逸れてしまいましたが。ところでカズマはダクネスに何を頼もうとしたのですか？」
「お願いしたかったがなぁ…」
「あぁ…もうカズマさんのトラウマになってる…」
「うっ…すまない。取り乱し過ぎた」
　ヨシヨシとクリスに撫でられるのがとても心地よ過ぎる。これは完全に聖母ですね（確信）
「まあ、まずは話してみなよ」
「…そうだな。埒があかなくなる」
　若干名残惜しいがクリスから少し離れる。すぐさまめぐみんが傍に寄ってくる。猫かな。
「俺らのパーティーの事についてなんだ。このパーティーにいるのは俺とゆんゆんとめ

ぐみん。冒険者1のアークウィザード2。それでいて全員スキルが後衛寄りで、めぐみんは爆裂魔法しか使えない。使った反動で倒れるくらいには。だからいざとなった時、めぐみんも含め仲間をカバー出来る前衛職が欲しい。もっと言うとめぐみんを背負っても戦うか支援できる存在も欲しいが、あまり欲は言ってられない」

ダクネス…気は進まないが。あと欲を言えばクリスが居たらと思う。

「盾と呼ぶには失礼かもしれないが、パーティーの前衛を担ってくれる人材が欲しいんだ。もっと欲を言えば、前衛でもサポートでも戦えるクリスが仲間になってくれればと思うが…」

盗賊と言う職業。ダンジョン攻略で引っ張りだこな職業だ。対して俺ら、上級職もいるようなパーティーではあるが、後に（笑）と付くような一発屋に、他人と話す事が困難に近いコミュ障ぼっち、そしてリーダーが出自不明の最弱職と言ったパーティーだ。他の冒険者に笑われる、と言うか最弱職リーダーとか俺も含め馬鹿にされる未来しかない。そんな所にこの女神様（確信）を入れる訳にはいけない…！あと他の冒険者からのやっかみで俺の胃に穴が空く。避けたい。何としても避けたい…！

「カズマ…。私たちの事を考えて…」

「カズマはとても真面目に、仲間のことについて考えていたのだな。…先程は無礼を働いた。こんな私でも良ければ、是非とも仲間に入れて欲しい」

先程のドロッドロに蕩れた顔とは違う。覚悟を決めた戦士の顔つきだった。剣は当たらずとも、このパーティーは火力高めだから何も問題は無い。性格性癖その他諸々難のあるパーティーだが、気にしてはいけない。今更だ。…ダクネスに襲われないように気を付けよう。でも襲われる事を望んでいるっぽいから、きっと大丈夫だろう。うん。

「クリスはどうだ？無理を言うつもりは無いぞ。自分のことを優先に考えて欲しいと思っている」

入ってくれれば心強い。若干美少女偏り過ぎたパーティーで胃に穴開きそうだが。でも断るだろうな。引っ張りだこな職業だし。

「そうだね…。このパーティーでなら私も一緒に旅したとい思う。誘われて入りたいとも思った。でも今回は頷くことが出来ない。あたしが言うと嫌味に取られるかもしれないけど、これでも他のパーティから臨時パーティーとして誘われる。それに、私にはやらなければならない事があるんだ。だから一緒に組むことは難しいと思うし、組んだら組んだで、あまりパーティーに入れないかもしれない。皆に迷惑かけちゃう。だからごめん」

「…そっか。それならしょうがないよな」

「でも、また今回みたいにパーティーに誘ってほしいな。今回のキャベツ狩り楽しかったよ」

「また頼らせてくれ。それと、俺らにも頼れることがあったら言ってくれ。できる限りの事はするから」
「そう言って貰えると嬉しいよ」
案の定ではあったが、クリスの勧誘は失敗した。それでも、前衛職を確保出来たのは僥倖だと思っている。
あとはキャベツの報酬が来るのを待つまでだ。

１６話　出来ることから

キャベツの収穫クエストから2日ほど経った頃、ギルドから召集がかかった。なんでもようやくキャベツ狩りの精算が終わったらしい。俺たちパーティーは無駄遣いを避けていたため、そこまで金には困っていないが、好景気な雰囲気で飲み食いに走る冒険者も多くいた。そう言う俺たちもここ数日は自由な時間に使っており、俺はこっちの世界の勉強を兼ねて、ギルドの事務仕事のお手伝いをしていた。と言っても簡単な書類整理くらいだったが、これが意外と大変だった。

膨大な書類の中から必要なものを探す。もちろん顧客情報には触れてはいないが、討伐クエスト関係の書類や、ギルドに届く嘆願書の整理などは触れる事ができた。後はギルドから王都に届ける手紙物品の仕分けもか。裏方作業はこんなにも大変なんだなと知る機会になったし、今度からギルド職員全員を労わろう。

「お待たせしました！キャベツ狩りへの参加ありがとうございました！皆様が納品したキャベツは無事完売し、市場へ流通するようになりました」

実はここら辺も手伝っていたりする。自分の手も加わって市場へと流通する姿を見て物流を担うのもありなのではと考えている。

「報酬金は順番にお渡しします！整理券を皆様にお配りしますので、呼ばれた方からこちらにお越しください！」

ギルドの職員さんが番号の振られた紙を配る。

不要になった資料の裏紙を活用した整理券だ。今までは我先にと列に並ぶ冒険者が多いとの事だったので、整理券渡して順番にやればいいのではという提案だ。元いた世界で言うアルファベット順で呼ばれることになる。俺はサトウ　カズマで登録されてるから頭文字Sなので、だいぶあとの方になりそうだ。

俺らのチームだとクリスを先頭にゆんゆんが最後って感じだ。

「このような紙が配られるなんて初めてだ。しかも裏を見ると元々何かに使ってたものみたいだ。新しい紙を使えば良かったのではと思うが」

「古紙の有効活用だよ。ただ破棄するだけじゃ資源の無駄だからな。使えるところは余すことなく使わんと」

「まるでウチの食卓みたいですね。魚やお肉はご馳走だったので骨まで頂いてました」

そうじゃない。いやそうだけども。

「ふむ。普段要らぬ紙は暖炉の餌にしていたからな。そういった発想もあるのだなと勉強になったよ」

流石に紙の製法に紙のリサイクル方法までの知識は無いからこう言った使い方しか

出来ないからな。あんまりコンプライアンス的な意識は低かったが。顧客情報も俺が意識して触れなかっただけで、普通に任されそうになったからなぁ。信頼されているのかもしれないが、ちょっと困ってしまう。悪人の手に渡ったらどうするんだろうな。

「１８番さーん！窓口にお越しくださーい！」

「あたしの番だね！」

思いの外窓口の流れはスムーズだ。この調子で行けばそう遅くはならないだろう。

これと言ったトラブルは起きず、最後にゆんゆんが来て総精算となった。

『こんなにお金が…こんなにお金が…』

めぐみんとゆんゆんが呆然とした表情をしている。

「あたしは７０万エリスだったね」

「私は１４５万エリスだった。守りに徹していたが、めぐみんの収穫分を集めたからな」

「私は９５万エリスでした！私は撃墜王です！」

「私は４０万エリスでした！でも撃墜王は私です！キャベツの討伐数が物語ってます！」

爆裂魔法であんだけ気絶させ爆散させればそうなるわな。いくつが塵と化したか。

「カズマはどうでした？カズマの収穫数もすごかったではないですか！」

「…２５０万エリス」
『２５０万エリス!?』
　幸運なことに収穫したキャベツほとんどが最高品質だったこともあり、通常１万エリスの所に泊が付いて値が上がったこと。それと窃盗スキルが驚く程に身体に馴染んだこと。中級魔法に比べて連発しやすいし。後はキャベツに刃を通す瞬間に快感を感じた。あれはいけない。脳が壊れる。
「やはりステータスに恵まれている人は冒険者でも大成するんですね。冒険者でここまで稼ぐなんて聞いた事無いですよ！」
「紅魔の里が外界と遮断されているからってのあると思うけどね？」
「もっと稼ぎのある者はいたが、変わり者の上級職だったな。こっちではあまり見かけない黒髪の背の高くない者だったイメージがある」
　…やっぱ転生者は役に立つスキルばかり手に入れているのか。…そういや御剣は元気にしているのだろうか。王都に旅出たっきり帰ってこねぇな。俺も成長したところ、ちゃんと見せねぇとな。
　それでも、まずはこの金の分配だな…。
「数字のキリは良いし５人で割って１２０万だな」
「か、カズマ？良いのですか？」

「カズマさん、折角それだけ稼いだのに」
「何言ってんだ？最初に分けると言ったのは俺だぞ？それにそれぞれの役割あってのこの報酬だ。何も遠慮すること無いだろ？」
俺１人でこれだけ稼げるかと言われたらそんなわけない。キャベツの集中砲火で下手したら死んでたからな。みんなのキャベツを集計するから、役割分担したのだから。
「そうだな。その為に役割を分担したのだ。それぞれの持ち前にしては、差が出てしまう」
「それに１２０万エリスだって十分とした大金。家は買えなくてもしばらく暮らしには困らないからね？」
間違いなく立派な金だ。使わなきゃ持ち腐れだが、あって困らない程の金額。これを決めるのにあーだこーだ言ってると余計な不和を招いてしまう。
「ほら、均等だ均等。みんなこれで文句無しって決めたんだ。俺１人じゃこんな額稼げねぇんだから遠慮しないでお願いだから！」
「…では、遠慮なく」
「３桁万円…」
「まだまだお子様には早い値段だったか？」
『お子様じゃないです!!』

そうムキになる所がまだまだ子供だなって、まだまだ対して年の変わらない女の子たちに思ってしまう。横でクリスとダクネスが微笑んでいる。なんとなく、姉や母って感じがする。俺に姉は居なくて生意気な弟が居たがな。
本当、家族に何も言えなかったな。
でも、ここで足踏みしたって何も変わらない。何も変えられない。
変化をもたらす為にはは行動を、必要なのは結果だ。
俺は、今自分が持てる全力で生きなければならない。出来ることを、出来ることを着実にこなす事が、人生の第1歩なのだから。

――――

――名が無き俯瞰――

「アクアーー!!アクアの大馬鹿者はどこだーー!?」
「あ、アクア様は人気アニメの店舗限定初回限定盤を買うと日本に行きました!」
「またあの子仕事サボってるのね!?」
「だ、大女神様そんな胃の痛そうな表情されて大丈夫ですか!?」
「これが大丈夫に見える!?」
飛び交う女神という単語、出る者出る者美女ばかりのそこは、恐らくこの世の場所で

はない事が推測できる。しかし、その中で一際美人な女性は、その美しい顔を歪ませて、額には皺が寄っていた。きっと何か大変なことがあったのだろうと、近くに居た天使たちは察していた。

「あーーもう！あのアホは居ないしあの子は楽しげにしてるし、これはもうロクでも無いことが起きたこと間違いなしだわ!!もうあのアホはクビだわクビ！追放よ！追放！顔合わせたらタダじゃ置かないわ！」

いつも以上にお冠な様子の大女神を、天使はただただ宥めるだけだった。

「一体何があったと言うのですか？それにあの子とは…」

「これを見なさい！」

大女神が突き出したそれは地方の新聞記事だった。『〇〇町の１６歳男性行方不明』と見出しが始まる。本文には１６歳男性（無職）と書いてあった。

「１０代で無職ってそれ穀潰しが消えて良いのでは？」

「私だってそこら辺で野垂れ死にするくらいなら気にも止めないわ」

凡そ女神と天使がして良い会話とは思えないが、当人たちは気にする素振りを見せない。

「では一体何があってそんな慌ててるのですか？」

「…神隠しよ」

「神々が犯人なのですか？１６歳無職の男性。大方学校にも通わず働かず親の脛を齧り続けネットやゲーム三昧で生きる価値無しな社会のゴミにいくら変わり者が多いと言えど神々が気にかけますか普通？」
「貴方口が悪いわよ？本当に天使なの？ちょっと怖いわ。なんと言えば良いのかしら。その変わり者の中の変わり者が居て、その子、こう言ったダメな男性好きなの」
「えー、なんですかその女神様。ＤＶしてくるパチンカスの男がたまたま勝って半額ケーキ買ってきたら最高に幸せな表情しそうな」
「例えがよく分からないけどあなたは昼ドラを観るのは辞めなさい。話を脱線させないで？」
「あはは。でもその女神とダメ男になんの関連が？」
　疑問を浮かべる天使の反応はごく一般的な反応だろう。関連性があるとは思えない。あったとしても何故そこまで慌てているのか。
「この男性、死んでないのよ」
「？それは良かったのでしょうか。一応。それならどこかほっつき歩いてるだけでは？」
「いいえ。その男性、もう元の世界に居ないわ」
「…それって変ですね」

今は席を外している死んだ魂を異世界に送る、クビを言い渡される手前の女神。自分の上司である彼女の仕業か、と思った天使だが、自分優先なあの上司がそんな下界の人間に一々干渉するとは思えなかった。
「こっちは何か変わったこと無かった？」
「変わったことですか？アクア様はいつもの事ですし…あ、今日知らない方が来ましたね？如何にも本に囲まれて過ごしてますって男出来たら人生捧げて尽くしそうな幸薄の女性が」
天使の喩えはイマイチな反応だった大女神が、額を抑えた。やはりと言った様子で、天使はもしかしたら自分が何かやらかしたかもしれないと、察してしまった。
「…犯人はやっぱあの子か…」
「犯人って、もしかして」
「生きてる人間を、他所の世界に持っていった。その人間の許可を得ず。関係を破壊するように」
深刻そうな顔をしている。その雰囲気に飲まれた天使は先程までの冗談めかした雰囲気をしまい込み、真面目な表情へと戻る。
「その女神様が…」
「…あの子、普段は古い書物を読み漁り、かなり古風な子なの。でも相当な力を持つ女

神。お気に入りの子にはとにかく強力な呪いとも言える力を授けることが出来る実力者なの。並の神々が太刀打ち出来る子ではないの」

一体なんのために、その糸口が掴めない大女神達は、その自称を前に解決の糸口を見いだせなかった。

「ところで、一体何者なのですか、その女神様は」

「…彼女は――――」

その名を口にした時、天使は目を見開いていた。

１７話　魔道具店の店主様

金に余裕が出来た。俺の中に眠るクズマならきっと自堕落な生活を送っていただろう。もしかしたら周りに酒を１杯奢っていたかもしれない。後先考えず行動していたかもしれない。

でもそれではいかん。１００万は大金だが、生と死が隣合わせのこの世界。自分への投資が先決。装備にスキル、アイテム。投資すべきことは沢山ある。そうなると１００万と言う大金、あっという間に無くなる。後は生活費もあるのだ。無闇には使えない。

「おぉ！カズマも冒険者らしくなりましたね！」

装備に対する出費は致し方ないものだと思っている。ジャージは動きやすいが場の雰囲気にそぐわないので非常に目立って仕方がない。

かと言って鎧を付けてしまえば動き辛い。１度甲冑を装備させてもらったがあれ着て全力疾走とか無理。小走りが関の山だ。

防御力は対してないが、一般的な服にグリーンのマントを着けただけのシンプルな格好にした。あんま派手なのは好きでは無いから白無地の服だ。地味かもしれないが、場の雰囲気に合わせるとちょうど良いだろう。そこまで高くないのも好ポイント。

「これも動きやすくて良いな」
最初はめぐみんオススメ黒ローブだったが、魔法耐性付きのそれはかなり高価で、尚且つ俊敏に動けず止めた。厨二病心燻られるデザインだったが、余計に目立つし。
「剣もショートソードを新調出来たし、文句無しだ」
これでレンタル生活とおさらばだ。
次いでに金を積んで鍛冶スキルの習得も出来たし。これで数十万飛んだことは見ないふりだ。装備プラスアルファで３０万エリス吹っ飛んだ。やばたにえん。
ショートソードは一般の冒険者が持つ様な、言ってしまえば初心者武器。良くも悪くも普通の剣だが、経験を付けるには手頃なのは間違いなし、だと思っている。
将来的にはｍａｄｅ　ｉｎ　俺　にする予定ではあるが、今はそのときでは無い。それは住環境を全て整えた後の話だ。
「カズマさんはこの後何しますか？」
「うーん。欲しいものは揃ったし、適当に街を散策かな？」
「で、でしたら、一緒に行きませんか!?い、いやでも私とが嫌でしたらべ、別に断ってくれてもいいんですよ!?私なんかと一緒に「はいストップストップ」え、か、カズマさん？」
この子はパーティー組んでもぼっちを拗らせるのか。最近大人しかったんだけどな。

「俺は良いよ。寧ろオススメあったら案内が欲しい」
「え、良いんですか!?」
「良いも何も、俺がお願いしたいくらいだよ」
「ほ、本当！良かった…」
　…この紅魔族２人に対する保護欲はカンストしそうだ。ぼっち極めたゆんゆんは結構寂しがり屋で、かまって欲しいって表情するし、多分犬だったらしっぽブンブン振り回してる。この子将来騙されないかな…お兄ちゃん心配。
　そして横でめぐみんがむくれてる。こっちも構えと服を引っ張ってくる。こっちは猫だろうな。どちらも甘えたがりなのは変わらないが。
「２人はどうする？」
「私も行きます！」
「私も着いていこう。こう言うのは人数が多い方が良いと聞く」
　…なんとなくだが、ここにいるメンバーって若干…いや、結構人付き合いが得意な人間ではないよな。ぼっち拗らせに血の気の強い奴に、ドＭ過ぎる奴。そして引きこもり。対人関係行けるとは思えん。
「む、そんなに私を視姦してどうした？遂に欲望を私に晒け出そうと言うのか!?」
「あ、いや。うん。……うん」

「なんだその反応!?言いたいことがあれば言え！いや！言わないでもいい！そうして蔑んだ目で見られると私も興奮する！」
「あぁ…カズマの目がどんどん死んでいきます…」
うーん。仲間に入れたのは早計だったか？
でもまあ、頼んだのはこっちだし。頼んだくせして追い出すのもなぁ。やりたくないしな。
「カズマさん！早く行きましょう！」
「あぁ分かった」
ゆんゆんはかなり乗り気だ。お気に入りの店を共有できることがよっぽど嬉しいらしい。カズマお兄さんなんとなく分かった。テンションがいつもより、なんならキャベツで大金が入ったことよりも高いから。

「ここです！」
街の中にひっそりと佇むお店。看板には『ウィズ魔道具店』と書かれている。…いや、本当に言語は学んどいて良かった。ローマ字形式で助かった。
「魔道具店？」
「はい！優しい店主さんのお店なんです。カズマさんの冒険に役立てるものがあるか

なって」

魔法にそこまで精通してる訳では無いから、役立てられるかは分からないが…。折角ゆんゆんが誘ってくれたんだ。１つでも多く役立てるようにしよう。

カランカラン「いらっしゃいませー！」

ドアの鐘が涼し気な音を立てると、それに気付いた店員さんがすぐさま反応する。

「あら？ゆんゆんさんじゃないですか！…そちらの方達は？」

「ウィズさんこんにちは！この人たちは私の冒険者仲間なんです！」

出迎えてくれた店員さんはかなり美人な方だった。なんだろう。言葉に表すのは難しいがふわふわっとした雰囲気。あれだ。癒し系のオーラが漂っている。物腰の柔らかそうな女性だ。

「カズマです。一応ゆんゆん達のパーティーのリーダをやっている冒険者です。こっちはクルセイダーのダクネスとゆんゆんと同じアークウィザードのめぐみんです。ゆんゆんがお世話になっていると伺っています」

「そんなに畏まらなくて大丈夫ですよ！私はウィズ。この小さな魔道具店の店主をしています。もっと気楽に接して頂けるとありがたいです」

笑顔が眩しい。癒される。大人のお姉さんに魅力を感じる俺にとって、この店の常連になる決意をした瞬間だった。

「カズマ、顔が崩れてますよ」
　おっと。しっかりしなければ。
「今日は何かお探し物ですか？」
「あぁ、これと言っては決まってないけど、何か冒険に役立つものがあれば買いたいなと」
　おっ、ポーション見っけ。一体どんなポーションなの「あっ、それは衝撃を与えると爆発するポーションです！」…今なんて？
「ではこれは？」
「それは水に触れると爆発するポーションです」
「…この隣は」
「それは蓋が開くと爆発するポーションです」
「この店は爆発物専門店ですか？」
「違います！そこは爆発系ポーションのエリアなんです！」
　そんなコーナーあってたまるか。この店がなんとなく地雷だと言う予感がした。爆発ポーションだけに。
「えぇ…。…他に何か役に立ちそうなものは…」
「そうですね…これなんてどうですか？『カエル殺し』！カエルの餌に見える炸裂魔法が

封じられた魔道具なんです！」
「…ほうほう。お値段、そしてカエル以外の効果は…」
「お値段はなんと２０万エリス！これはカエル系の魔物には有効ですが、それ以外の魔物は見向きもしないです！いかがでしょうか！」
ダメじゃねぇか！他の商品も地雷じゃねぇか！
何見て「ヨシッ！」って言ったんですか!?
「いえ、遠慮します。あと間違いなく売れないと思います…」
「そんな!?アクセルは周辺にジャイアントトードが多いので有効になると思ったのに!?」
何見てそう思ったの!?
「一般的なカエルの５匹の討伐クエストでも大赤字叩きだしますよ。基本的に剣や鉄防具があれば問題ないのですが…」
うちが一般的じゃないだけで。
「そ、そんな…！５０個ほど発注したのに…！」
この人絶望的に商才が無い…欠如してる…。貧乏に、貧乏に愛されている…。決意が崩れた…。
「ゆ、ゆんゆんはいつも何買ってるんだ？」

「私はいつも回復ポーションを買っていますが…」
　あぁ、普通のポーションとかもあるんだな。なんかヤバそうな魔道具やポーションしか無いと思ってたけど、ちゃんとあるんだな…。回復ポーション。ヒーラーの居ないうちのパーティーじゃ必須アイテムだよな…。…逆に言うとそれ以外に良い物は…。やめよう。考えるのはやめよう。
「でもウィズさん、すっごく聞き上手なんです。いつも私なんかの話を聞いてくれるんです！」
　良き理解者なんですー！っと健気に話すゆんゆんに涙を禁じ得ない。めぐみん、この素直で心優しいゆんゆんが何故ぼっちなんだ。ええ？なんで目を逸らした。
「…んん！でもこれではカズマの役立てるアイテムがポーションくらいしか。紅魔族の知能を凌駕するカズマならあっと驚くような使い方をしそうですが…」
　なんでハードル上げたの？ねぇ、なんで？
「カズマさんもウィザード職の冒険者なんですか？」
「いえ、正真正銘最弱職の冒険者です」
「本当ですか？伺う限り魔力も高いように感じられますが…」
「うちのカズマは特殊なんです」
　なんかキリッとした表情で語る。それ俺のセリフだぞめぐみん。勝手に奪わないで。

「そうなんですね！ステータスを拝見しても？」
「どうぞ」
　あんま人に見せるものでは無いとは思うが…。まあ、あんま悪用するようには見えないしな…。
「すごい！どの職業にもなれるステータスじゃないですか！そのレベルを考慮してスキルも豊富で…冒険に役立つのか分からないスキルもありますが…。…最後のは？」
「分からないんです」
「分からない…ですか？そう言ったこともあるんですね」
　お返ししますと、一頻り見終わったウィズさんは冒険者カードを返した。
「良ければなにかスキル教えましょうか？」
「えっ、良いんですか？でもウチは魔法職なら間に合ってるんですが…なにかスキルが？」
「はい！カズマさんのパーティーだと『ドレインタッチ』っていうスキルが役立つはず」
「カズマ！下がってください！」
「えっ？お、おいめぐみんにダクネス！いきなり割り込んで「ドレインタッチは…それは人の理を捨てた大魔法使い、不死王『リッチー』に許された固有スキルです！それが使えるのは禁呪を用いアンデッドに身を落としたアークウィザードと冒険者のみ！」な、

なんだって!?じゃ、じゃあゆんゆんは…「ええ、操られている可能性が！ゆんゆんはチョロ過ぎるので！」そ、そんな…「ねぇなんで？ねぇなんで私の扱いが雑なの!?」「操られているだって？そんな無垢な少女になんてことを!?私が代わりに！」やっべ収集つかなくなった見辛い！一旦落ち着けお前ら！」

ウィズさんがアンデッド。魔物。しかもリッチーとか危険度ＭＡＸの敵…。いや、見えん。ここまでぽわぽわした雰囲気だとそうは見えん。人畜無害そうだし。

「で、ウィズさん。貴方がリッチーなのは本当なんですか？」

「ええ、私はリッチーです。こうしてお店を持つのが夢なリッチーです。誰かに危害を加えようとは企んでは…。なので、あんまりリッチーってことは…」

…話してもバカを見られるだけだろう。

「…ダクネス。悪いがウィズさんから冒険者カードを拝借して欲しい。ウィズさんも身の潔白を証明する為に協力頂いても問題は無いですか？」

「はい。そもそも疑われるようなことを話したのは私でしたから。カズマさん、魔道具を見てもあまり気にいった雰囲気無さそうでしたので、他に役立ちそうなものと言えばスキルくらいしか」

…すんませんでした！俺のせいじゃねぇか…。

「ほら、カズマ。しかし一体何故冒険者カードなのか？悪用するとは思えんが…」

「今まで倒した者に人間、ヒューマンが居なければそれが全ての証明だ。モノの命を刈り取る以上、それは経験として冒険者カードに記される。…うん。ウィズは無実だ。ここであったことは口外しない。いいな？」

逆にえぐい数の魔物を狩っている。この人実は怖い？

「…まあ、カズマが言うなら…」

「しかし、こう易々とアンデッドを見逃してしまっても良いのだろうか…」

「ダクネスは頭が固いな。寧ろスキル習得に協力してもらえるなんて心強いぞ」

俺は最弱職の冒険者。スキルはあるに越したことは無い。有効なスキルが複数あれば、それだけで戦闘の幅が広がるってもんだ。

「カズマは変わっているな」

「ダクネスが言えた口では無いがな」

「ンンッ！」

本当ブレねぇな。

18話【秘技】リッチーのスキル

しかしリッチーのスキルか。棚からぼたもちと言うべきか。案外予想だにしないところから見つかるんだな。こんな寂れた魔道具店の店主さんがリッチーだなんて、この世界なんかおかしいよな本当に。

「ところでドレインタッチってどんなスキルなんだ?ドレインと言うくらいだし、なにか吸い取る様なスキルな気がするが」

「その通りで、ドレインタッチとは触れた相手の体力や魔力を吸い取るのが主なスキルです。それ以外にも触れた相手に自分の魔力や体力を与えたりも出来るんです。カズマさんは十分な魔力と体力を持っていますし、めぐみんさんやゆんゆんさんはアークウィザードなので、より効果的に発揮出来ると思います!」

なるほど。確かにクエスト中めぐみんやゆんゆんに魔力を与えられるならばうちのパーティーの火力を補うことが出来る。俺のような初心者が魔法を使うよりも、その道のプロが使う方が戦力にもなるだろうからな。魔力は本職並みにあるらしいし、いい感じにサポートに徹することが出来るだろう。

「お願いします！俺にスキルを教えてください！」
　使えるものならなんだって使う。それが例え禁呪を超えた先にあるとしても。リスク無しでそれが使えるから俺は手に入れるだけだ。こんなイベントゲームだって終盤に行かないと、もしくは隠しイベントで発生するようなものだ。ここは習得しないって選択肢が無い！
「しかし本当に良いのだろうか…。カズマが魔の手に染まり…」
「スキルとしてある以上は問題ないのだと思いますよ。でもそう考えると魔物のスキルですら覚えられてしまう冒険者って、やり方によっては大成しますよね。カズマはその中でも特殊過ぎますが」
　まあ、通常威力が下がるところ下がらなかったり習得コスト跳ね上がるところ跳ね上がらない、見たスキルを覚えられるは十分にチートだよなぁ…。こんな訳分からない土地に来て何もなしだったらいよいよ死んでいたからな。未だに理由が分かってないけど。
「一般的に冒険者のスキルは習得に対してのコストが通常より高くなります。しかも本職に比べて威力が劣ります。しかしこれらはスキルに対する理解や元々の能力で変わってきたりもします。本当に能力が低く基本職にすら就けず最弱職へ。そうなってくるとスキルへの理解も難しいですし、何より効果的にスキルを使用できないため一般

職の基本的なスキルしか使えなかったりします」

なるほど。それは初耳だ。つまり能力優秀な冒険者は、そもそもスキルに対する理解が深まりやすく、そもそものステータスが高いからスキルを効果的に使えるのだろう。それでも本職には劣るのだろうが、全体的に8割ほどの力を使えれば十分な気もする。スキルさえ教わることが出来れば。

「つまりカズマのようにステータスの高い冒険者は爆裂魔法と言ったスキルも理解度が深まればコストを抑えて習得できるということですか!?」

「ええ。と言っても本職の基本値より下回ることは無いですが」

「なるほど。だからカズマは私と同じコストでスキルを習得できるのですね！」

「カズマさんスキルに対する理解度深過ぎませんか!? いくら聡明な方でも知り尽くすレベルでの習得は年単位で掛かりますよ!?」

なるほど。だからこその加護か。誰の加護かは知らないけども、スキル関係にバフがかかる加護なのは間違いなさそうだ。1度見たスキルに対する理解度を最大に、それによって本業と同じコストで習得できる。

「えっと、話を脱線させてしまいました。本題に入ると広義的な冒険者のスキルと言うのは、基本職の冒険者が習得する際は通常よりコストがかかるとお話しましたが、それ以外の職業の方が使うスキルは基本的にコストは最低値の1ポイントで習得できます。

料理人の料理スキルなどが該当しますね。もちろん本職と全てのスキルを習得できる冒険者しか習得できないですが」

確かに、料理スキルや裁縫スキル。もっと言うと各職業の基本スキルはコストが低かった。手軽な感じで習得したが、確かに冒険者だからこその強みだろう。

「それを踏まえてお話しますと、リッチーという職業は広義的な冒険者に含まれない。言ってしまえば魔族、その他職業のスキルになります。魔族のスキルを冒険者は最低コストで習得できるのです」

えっなにそれ。チート過ぎない？

「勿論習得しても本職に比べて能力が劣ってしまいます。これは他のスキルと変わりませんがそれ以上に教えを乞うところまで行くのが難しいですね。私が言うのもおかしな話ですがリッチーはそうそう居ないのと、敵対してもおかしくない種族ですからね」

あー、これはあれだな。幸運補正だな。ウィズさんが温和で友好的でスキルも簡単に教えてくれると言ったアレなだけであって。

「ちなみにドレインタッチは魔力体力を動かすだけで、それによって魔力体力は消費されないのでかなり有効なスキルですよ！」

チートだなぁ…。吸い尽くせば相手お陀仏じゃん。

「まあ、自分が吸える上限以上に吸うと、身体が耐えきれなくなり物理的に破裂します

が」

こっわ！怖！限界知らんと死ぬやつだったか…いやそりゃそうやろってなるけどさ…。吸いすぎてもダメなんだな…。

「本職の方にここまでオススメされたら是非とも習得したいですが、何か裏でも…」

「裏ですか？いえ無いですよ。ゆんゆんさんにはいつもお世話になっていますし、そのお礼です」

この人本当は女神なんじゃないか？綺麗だし、幸薄そうなところはあるがそこがまた儚さを醸し出し、誰かのためにここまでできる。女神かな？信仰対象かな？絶望的に商才に恵まれていない事を除けば女神だろうな…。

「疑ってすみません。是非とも伝授お願いします！」

「はい！任されました！では実際に吸ってみましょう！『ドレインタッチ！』」

ウィズさんが俺の手を取りスキルを唱えると、ゆっくりながら何か抜けていく感じがする。主にライトニングを全力で放った時と同じようなあの感覚。より研ぎ澄ませるとそれが魔力なんだなと感じる。身体の中を巡回する魔力が流れ出る感覚だ。

「カズマさんは感じていると思いますが、これが魔力が抜けていく感覚。それでこれがドレインタッチです。失った魔力を討伐したモンスターから吸い取ることも出来るので回復スキルとしても重宝できます」

魔力の流れを感じていると、結構重要そうな使い方を教えてくれた。これは本当に戦闘の幅が広がる。

「これでカズマさんの冒険者カードにドレインタッチのスキルが追加されていると思います。選択すればスキル習得になります」

冒険者カードを取り出すと本当にドレインタッチが記載されていた。

「アークウィザードが在籍するパーティーでこのスキルは非常に有効なスキルではあるが、仲間がアンデッドのスキルを習得するのを見るとエリス教のクルセイダーとして複雑な気持ちだな…」

「これがあれば爆裂魔法撃ち放題じゃないですか！素晴らしいですカズマ！共に爆裂道を歩もうじゃないですか！」

「魔法使用の制限が実質的に解除されたことを喜ぶべきなのか、新たな脅威が生まれたことに頭を抱えるべきなのかしら…」

三者三様の感想だった。

「まあ、実際に使ってみるか。ダクネス」

「クっ！女神に使えし聖騎士にリッチーのスキルを奮うなんて…なんたる外道！きっとここで私が盾にならなければ、年端も行かぬ少女に魔の手が伸びてしまう！民を守る聖騎士としてここは引けない！さあ来いカズマ！私の力を存分に吸い取りあられもない

姿に！」

人選間違えた。アークウィザードであるめぐみんやゆんゆんから吸い取るのは気が引けたので、消去法で体力あるダクネスからちょこっと貰おうとしただけなのだが。人選間違えた。と言うかパーティーメンバーを誤った。

だが仕方ない。選んだのは俺だ。俺が責任取らないとな。

「心臓の近くで、皮膚の薄いところからだとより効率的に吸えますよ」

「今回は普通に手から吸ってみます。という訳で失礼」

軽く手を包むように持つ。なんだろう。女性の手ってこんなにも儚いのか…。

『ドレインタッチ』

スキルを唱えると、自分の手から魔力が流れてくる。これが魔力を流すって感覚なのだろうか。人の魔力が流れてくるなんてなんと言うか妙な感覚だ。

「ありがとう。何となくコツを掴めたよ」

「…そんな優しく手を包まれると、なんと言うかむず痒いな…」

…本当にダクネスのスイッチってどこにあるか分からない。初心なのか変態なのか。箱入り育ちなのは容易に想像はつくが。きっと彼女はどこかで出会ってしまったのだろう。自分を痛めつける時の快感に。

「しっかし、吸ったら出さんと苦しいだろうな」

「許容量を超えた魔力生命力を体内に保持しますからね。許容量の多い人や限界まで耐えられる性質であれば良いのですが。実際のところリッチーは魔力は底無しですし、魔力が溢れて破裂って考えられないんですよね。そもそもリッチー以外がドレインタッチを使ったりはしませんので、実際に破裂したケースは見たことありませんが」

生命力魔力吸収し過ぎにより破裂した最初よケースにはなりたくねぇな……。

「何はともあれリッチーの持つレアスキル、習得できたのはかなりデカイぞ！ありがとうウィズ！回復ポーションいくつか買わせてくれ！」

「はい、毎度あり！」